人口問題研究所
研究資料第173号
昭和42年1月10日

Institute of Population Problems
Research Series, No. 173
January 10, 1967

貸出用

オッペンハイマーのマルサス主義批判

COMMENT ON MALTHUSIANISM BY FRANZ OPPENHEIMER

皆川勇一

YUICHI MINAKAWA

厚生省人口問題研究所

INSTITUTE OF POPULATION PROBLEMS
MINISTRY OF HEALTH AND WELFARE
Tokyo, Japan

序　　文

本資料は，ドイツの社会学者フランツ・オッペンハイマーの著者"社会学体系；第三巻，純粋経済学および政治経済学の理論；下巻，社会経済（第5版 Jena, Verlag von Gustav Fischer, 1924年）"の内のマルサス主義批判に関する部分の翻訳紹介である。

紹介ならびに翻訳は人口移動部分布科長厚生技官皆川勇一の担当によるものである。

本資料が，わが国の人口理論研究や人口問題の研究に多少とも参考になれば幸いである。

昭和42年1月10日

厚生省人口問題研究所長

館　　稔

FOREWORD

This publication presents comment on Malthusianism by Franz Oppenheimer in his work titled "System der Soziologie; Dritter Band, Theorie der reinen und Politischen Ökonomie; Zweiter Halbband, Die Gesellschaftswissenschaft" (Fünfte Auflage, Jena, Verlag von Gustav Fischer, 1924).

Introduction and translation in Japanese was conducted by Mr. Yuichi MINAKAWA, Chief of Population Distribution Section of Migration Research Division.

I do hope this may be contributable to the studies of population theory and population problems in Japan.

January 10, 1967

Minoru TACHI, Director
Institute of Population Problems
Ministry of Health and Welfare
Japan

目　　次

序　説　オッペンハイマーのマルサス主義批判について

本　稿　オッペンハイマー：マルサス主義批判

〔フランツ，オッペンハイマー著：社会学体系；第3巻，純粋経済学および政治経済学の理論；下巻，社会経済；第2補，国民経済，市場経済；第11節，資本主義〕

Ⅱ　資本主義の発展傾向

a）Sozialliberalismus　の見解

b）Bourgeois-Liberalismus の見解

1.　マルサス的変種：人口法則

A．人口扶養余力逓減の法則：絶対的過剰人口

α）マルサスの論証

β）マルサスの主張

1.1.　人口の都市化

1.2.　農業生産統計

B．予言的マルサス主義

α）"数字で欺瞞するマルサス主義"

β）"相対的過剰人口"

C．総　括

D．人口法則をめぐる論争について

CONTENTS

Prefatory Remarks

Comment on Malthusianism by Franz Oppenheimer

Franz Oppenheimer: System der Soziologie; Dritter Band, Theorie der reinen und Politischen Ökonomie; Zweiter Halbband, Die Gesellschaftswirtschaft, Fünfte Auflage, Jena, Verlag von Gustav Fischer, 1924.

Zweite Hauptabteilung, Nationalökonomik: Die Marktwirtschaft.

Elfter Abschnitt. Der Kapitalismus, pp. 1029-1083.

II. Development Tendency of Capitalism

a). Doctrine of Social Liberalism

b). Doctrine of Bourgeois-liberalism

1. Malthusian Variant: Principle of Population

A. Law of Diminishing Population Supporting Capacity: Absolute Over-population.

α). Proof of Malthus

β). Assertion of Malthus

1.1. Urbanization of Population

2.2. Production Statistics of Agriculture

B. Predictive Malthusianism.

α). Malthusianism Deceiving us by Figures

β). "Relative Over-population"

C. Summary.

D. Concerning the Debate on the Principle of Population.

序　説　　オッペンハイマーのマルサス主義批判について

以下に翻訳紹介するのは，Franz Oppenheimer, System der Soziologie; Dritter Band, Theorie der reinen und Politischen Oekonomie; Zweiter Halbband, Die Gesellschaftswirtschaft, Fünfte Auflage, Jena, Verlag von Gustav Fischer, 1924年 の Zweite Hauptabtailung, Nationalökonomik: Die Kapitalismus の II. Die Tendenz der kapitalistischen Entwicklung のうち，a) Die Lehre des Sozial-Liberalismus および b) Die Lehre des Bourgeois-Liberalismus の部分（原本の1,029ページから1,083ページまで）である。

オッペンハイマーの社会学体系という著書は，1922年から1929年までの8年がかりで書きあげた4巻6冊の莫大なもので，内容的にも初期のコント・スペンサーによつて形成された綜合社会学に近い広壮な学問的構成の上に立つている。4巻のそれぞれは，第1巻一般社会学，第2巻国家，第3巻純粋経済学および政治経済学の理論，第4巻ヨーロッパ社会経済史概要という標題もち，それぞれ400ページから1,000ページを越すむしろ独立の大著といつてよいものである。

ここでは彼の社会学理論の体系全体にわたつての解説を行う余裕も準備も持ち合わせていないので，当面の目標である彼の第三巻の下巻に組み入れられているマルサス主義批判の部分について，若干の蛇足的紹介と検討を試みることにする。

資本主義の発展傾向と題するこの部分で，オッペンハイマーは，これま

での経済学説が資本主義の将来についてどのような見解に立つかについて，まず，a） Sozioliberalismus b） Bourgeois-Liberalismus c） 科学的社会主義（マルクス主義）の順に検討を行ない，d） 発展の現実傾向および，e） 資本主義の概念と本質で，自らの立場を明らかにしている。

a）の Sozialliberalismus の見解については，ケネー（Quesnay）とスミス（Smith）がとり上げられる。彼等は資本主義の発展傾向については全く楽天的であり，たとえばスミスは，個々人の私利の追求が，総体としては社会の繁栄をもたらすという調和理論に立ち，物的生産についても，分業が生産性の上昇に対してもたらす偉大な効果を強調しており，また富の配分に関しても，はなはだ楽観的であつた。スミスは，労働者の賃金は，彼等のためにそれ以前の生産期間に貯蓄によつて蓄積された"国民経済的意味における資本"の大きさにより決定される。それ故労働力の供給価格はすべての物財と同様（人口よりも急速に増大する）収益逓増の法則の下に置かれるから，協業の増加と共に，賃金もたえず急速に上昇するはずである。つまり分子である労賃部分のkは，分母をなす労働能力あり労働の意志を有するプロレタリアートの数pよりも急速に増大するはずであるというのがスミスの結論であつた。

ところでこの楽観論をうけついだものが，ケリー（Carey）とバスチア（Bastiat）であり，これらの人々を総称して彼は Sozialliberalismus と呼んでいる。

だが Sozialliberalimus の所説が，現実の発展過程，すなわち資本主義の発展にともなう貧困の増大という事実に即していないことは明らかである。それ故，資本主義の発展傾向について，むしろ悲観論に立つ第二の見解，つまり，b） Bourgeois-Liberalismus の所説の検討が問題となる。

オッペンハイマーは，スミス的楽観論が，マルサス的悲観論に転廻するに至る理由として，まず心理的理由，つまり，封建的諸権力を打倒してみづから支配階級となつたブルジョアジーのプロレタリアートの圧力に対する恐怖。第二に，論理的理由として，社会発展に関するスミスの予見の誤まりを挙げている。第二の理由の問題とはこうである。すなわち資本蓄積はスミスの夢想よりもはるかに急速であり，労働者の人数などよりはるかに急増した。したがつてこの資本のうちの労賃部分も，労働者の頭数以上に増大し，賃金も上昇せねばならなかつたはずなのに，賃金はむしろ下降している。これをどう説明すべきか。

これについては，Bourgeois-Liberalismusの立場に立つ二つの説明，すなわち1.マルサス的変種と，2.リカルド的変種が存在するが，この矛盾を人口法則という補助手段を媒介として説明しようとするのがマルサス主義者であり，ここでマルサスの人口法則が問題となる。

I．マルサス的変種：人口法則

マルサスは先の課題を"人口論"の内でつぎのように解決した。マルサスは，まず社会的資本という不明確な概念を，労働者の生活手段（Unternaltsmittel）という概念におきかえた。何故なら，彼等の賃金は結局扶養手段の購入に使用されるから。ところで，このような生活手段の内，食糧は第一位に位しており，さらにその蓄積量が就業者数を妥当な線に制限する。住居・衣服などは労働者階級自身によつてもある程度は自由になるが，もし食糧の蓄えが保証されていないと彼等は生存できない。したがつて賃金の決定的部分は，食糧と労働者の数の間の関係によつて決定される。

マルサスのこの考え方は，スミスの賃金理論の新解釈であるが，さらに今一つマルサスの自然法則（Natur Gesetz）つまり人口扶養余力逓減の法

則がここに登場する。すなわち人間の数は，彼等の使用に供せられる食糧よりも常に必らずより速く増大する。それ故この法則に従うならば，労働者の需要に対し食糧は絶えず不足する訳だから，彼等は飢えないために競つてその労働力を安売りせねばならず，その賃金は彼等の階級の生活必需品，場合によつては生存のための生理的最小限に迄引き下げられる。これが賃金低下のマルサス的解釈となるわけである。

オッペンハイマーは，マルサスの以上のような理論のイデオロギー的意味をつぎのように考える。市民社会における貧困の原因がこうした自然法則に由来するものと考える見方は，市民的経済秩序を先天的永遠的な範疇と見なすことに通ずるものである。したがつて，マルサスは全ての社会主義的改革理論（オーエン，コンドルセー，ゴッドウイン）をこうした自然法則を認識していない無邪気なおとぎばなしの妄信ときめつけ，それによつて彼の説は，ブルジョアジーに対し，これらの社会主義者の非難に逆ねじを喰わせる論理を提供した。「かくて彼は政治的，社会的階級闘争における決定的な武器，すなわち良心の安らぎ，正義は我にありという感情を与えた。」（１０３６ページ）そしてこれが，マルサス理論が百年以上たつた今日でもなおブルジョア経済学の支柱となつていることの理由であり，政治のためのパンフレットづくりが偉大な思想家の序列の末席に連なり，惨憺な似而悲科学的駄作が永遠の作品の序列に加わることになつた理由でもある。

このようにマルサス理論のイデオロギー的意味を明らかにしたのち，オッペンハイマーは，マルサス人口理論の検討に入る。

Ａ．人口扶養余力逓減の法則：絶対的過剰人口

マルサスが著述家や哲学者に必要なあらゆる資格を欠いているのは明らかである。彼は事実に対しなんら明瞭な思想を持たず，事実の批判的な取捨選

択および聰明な整理もなしえず，無意味に拾い集められた事実をつみ重ね，それを彼が抱いていた唯一の思想と共に一冊の部厚い書物につめ直したのである。

ところでこの唯一の思想というのも，実はある思想家（フランクリン）に由来するものであり，しかもそれ自体は正しい思想なのだが，マルサスによつて全く誤用されるに至つた。この思想というのが人口扶養余力逓減の法則つまり絶対的過剰人口の理論で，フランクリンは，それを「全ての生物が，その生活空間をこえて増加しようとする傾向」として表現した。このフランクリンの思想に影響されて，ダーウインは，それを野蛮な採集経済の上に立つ生物の世界に適用したが，これはその限りでは正しい。

だがマルサスは，これを協業の上に立つ人間社会の文明の進んだ生産力の高い経済生活に適用し，進んだ文明と高い生産力を持つ人間も，野蛮な採集経済によつて生存する生物と同様〝その生活空間に無理につめ込まされている〟と考えるようになつた。マルサスの考えは，結局，扶養空間をこえて増加しようとする恒常的傾向は，生物の数が食糧によつて規制されているため決して現実化することはないが，生活空間は，つねに生物によつて一杯に，窮屈なほど満たされており，新らしい生物が生れても死滅するか，あるいは，自分が生きるために他の生物を死滅させねばならないような状態にあるということになる。これはフランクリン＝ダーウイン的法則に他ならないが，このような状態を人間社会に対しても考えた点が，前二者とマルサスとの違いということになる。

α）マルサスの証明

それでは，マルサスは人間が生活空間に無理につめこまれているというこの命題をどのようにして論証するのだろうか。彼はこれに対し二つの論証方

法を用意しているが，第一の帰納的論証は，無批判にかき集められた抜粋で，こうした根気の産物に一言でも費すのは無駄なことである。これに対し第二の演繹的論証はある種の取柄をもつている。少なくともそれは百年間も，ケリー（Carey），ロードベルトス（Rodbertus），デューリング（Dühring）マルクス（Marx）などの多くの批判にたえ得たほど巧みな詭弁の上に築かれていた。マルサスの演繹的論証というのは，人口扶養余力逓減の法則を収獲逓減の法則の単なる系として展開することだつた。マルサスは，私経済の収益性に関して疑問の余地のない収獲逓減の法則を社会経済的生産性に変形し，これを食糧生産に適用した。こうして，人口は幾何級数的に増加しようとするが，食糧は算術級数的にしか増加しえないという命題が生れ，この人間の旺盛な生殖傾向に対する積極的抑制としての貧困，飢饉，戦争の必然性も論証される。そしてこれがまた"人口法則"の証明ともなる。したがつてマルサスがここで使用しているような形での収獲逓減の法則を正当なものとして認めてしまえば，人口扶養余力逓減の法則もまた正しいものと認めないわけには行かなくなる。つまり，それは収獲逓減法則の系にすぎなくなる。

だが収獲法則は，シーニオア（Senior）や古典学派のすべてが言つているように，"農業技術が一定のばあいにしか当てはまらない。このような条件が成立するのは，大農経営の私経済的な利潤計算のばあいだけであり，マルサスの問題にしている様な発展しつつある諸民族の社会経済的生産性の諸関係についてはあてはまらない。何故ならこのばあいには，人口増加により，より高度の協同が実現され，それはまた，よりよく職業的に訓練された労働者とよりよい道具と科学的知識によるよりよい自然の支配を生み出すからである。それ故"同じ条件の下では"という仮定は，なんら前提されているものではないのだから，収獲逓減の法則を人口扶養余力逓減の法則として論じ

てはならない。「扶養余力が逓減するか否か？という問題は抽象的な計算によつて解決される演繹的問題ではない。それには３つのばあいが考えられる。

1. 土地全体に投下された労働がより多くの収益をあげているにもかかわらず，一人当りの収益が以前よりも低いばあい。
2. 以前と同じばあい。
3. 以前よりも高くなるばあい。

１が現実であるならば，マルサス主義は，量的に和らげられた形でともかく存続できる。

２のばあいには，逓減法則は補償され，３のばあいには補償されて余りあることになるが，いづれのばあいが現実であるかは統計によつてのみ明らかにされる。」（1,043ページ）

β）マルサスの主張

ところで，「統計は第三のばあいが現実に相応していることを示している。収獲逓減の法則は実際には充分以上に補償されており，一人当りの分配量は減少せずに増大している。」（1,043ページ）オッペンハイマーはつぎの二つの統計的事実がこれを裏づけていると考える。

1.1. 人口の都市化

もしマルサスの法則（人口扶養余力逓減の法則）が正当であるとするならば，人口の都市集中などは起り得ない。だが資本主義の発展した国では逆で，たとえばドイツでは，１９世紀のはじめには，都市人口は２０％であつたが，１８７６年には５０％となり，今日（１９２０年）では７０％以上の都市人口を有し，しかもその間に総人口は２倍以上になつている。それ故我々の扶養余力は逓増していることになる。

1.2. 農業生産統計

すべての先進的で人口稠密な国々の農業生産統計は，つねに食糧生産の方が人口よりも速かに増加しており，全人口一人当りの食物量がたえず増加したことを示しているし，また，マルサスが正常と見なしているような不均衡一食糧生産の増加を上廻る人口の増大一がしばしばあつても，それはマルサスが考えた様な原因によつて生ずるのではなく，社会主義者が，しばしば弾劾するように〝悪い政治〟や社会体制の欠陥にもとづいている。たとえば，マルサス説の支持者達が誇らしげに指摘するロシア，印度，ルーマニアの過剰人口はその適例であり，したがつてこのようなばあいは，事実が問題なのではなく，現象の由来する原因が問題なのである。すなわち「一体何が資本主義的貧困の責を負わねばならないのか？自然の吝嗇か？あるいは改良の望みのある人間的社会的諸制度か？これが問題である。」（1,046ページ）

ところで，たとえばイギリスのばあいはどうか。イギリスの耕地では，その人口を養うに必要な食糧のわずかな部分しか生産されず，大部分はアメリカの小麦とオーストラリアの肉で賄している。だがこれはマルサスの法則に対して何の証明材料にもならない。なぜならイギリスでは〝過剰人口〟の事実は存在せず，賃金は百年来実質的にも名目的にも上昇している。また第二に，農業生産のいちぢるしい相対的衰退ということも，イギリス人がその資本と労働とを農業に投下せず工業に投下することを好むから，すなわち，農業生産の方が割が悪いから起つたことで，この事からもし彼等がそうしようと思つても，自分の消費する食糧を生産できないのだとは言いえない。したがつてイギリスが穀物を輸入しているのは，イギリスの農業がその耕地から可能なかぎりの収獲の絶対的最高限度に到達したためだという説明は意味をなさない。むしろその前に，もし彼等がそうしようと思つても，いいかえれば，農業がひき合うばあいにも，彼等は自分の食糧を生産できないのか？

それとも，彼等がヤヤラコや靴刷毛を造つて，それらと交換に自分の力で生産できるよりもより以上の小麦や肉を得られるばあいに，彼等はヤヤラコや靴刷毛の生産の方を好んで受け持つことになりはしないかどうか？　ということが検討されねばならない。

B．予言的マルサス主義

以上で本来のマルサス理論は論破された。ところでマルサスは，資本主義諸地域の過去および現在の大衆の貧困を，いわゆる人口扶養余力逓減の法則から説明した。マルサスのばあい，この法則は，たとえば重力の法則の様な自然法則として常時いたるところで作用するものとして考えられており，それ故，もし慎重なそして道徳的な抑制が行なわれないかぎり，現在と同じかあるいはなお悲惨な大衆的貧困が将来もまた起るであろうと予言した。しかしながらこれは普遍妥当的な法則の特殊な適用にすぎなかつたのである。ところが，この本来のマルサス主義とは別に，人口法則を予言としてのみ解釈する二つの学派が存在する。

α）数字で欺瞞するマルサス主義

この第一の学派は，遅かれ早かれ将来，地球上に〝絶対的〟過剰人口が予想されると脱くおどろくべき奇人達からなつている。もちろん我々にはこの珍妙な観念について心を悩ます必要はない。というのは，我々にとつては，過去および現在の資本主義社会での分配関係如何という問題の解明こそが課題なのであり，これを将来の人口過剰から説明することは不可能だからである。

だが方法上の誤りというものが，著名な思想家のばあいにもしばしば生じ得るという〝恐るべき実例〟を示すため，および，もし将来についての過剰の予言が証明されれば，過去現在についてはもはやどんな説明も必要ではな

いと考えている多くのマルサス主義者達が存在するので，彼等のためにもこの見解に簡単にふれてみたい。

彼等の主張は，単位面積当りの人口扶養力には限りがあり，しかも人口が一定の速度で増加して行くならば，地球上にはいつかは絶対的人口過剰の状態が到来するということである。彼等の主張は，現在世界の人口が何等かの程度で増加しているという周知の統計数字に基礎を置いている。そして，このような統計数字を一本の直線の一端と見なし，人口は将来一定の速度でさらに増加し，ついには地球全体が可能な最大の密度で覆われるようになり，そのとき食糧の割合が少なくなるにちがいないと無造作に結論する。

だがこうした計算はスピッツコップ（Spitzkopf）流の計算を未来について行なつたもので，全く馬鹿げている。我々が使用できる短かい統計数字の時系列から，何等かの結論を引き出そうとするのは，全く許し難いことであり，我々は過去における出生超過についても，未来における出生超過についても確実なことは何も知らない。　我々が知つているのは，せいぜい文明諸国の人口がほぼ１００年来増加しているということだけである。

したがつて未来についてのこうした悲観論は全くの臆説でしかない。だがともかく彼等はどんな計算を行なつているだろうか。

１８９１年にラベンスタイン（Ravenstein）が次のような計算を試みている。彼は，食糧輸出国が未だ食糧自給という観点から人口収容余力を持ち，輸入国ではもはや人口収容余力をこえていると見なし，全世界を輸入国と輸出国に分け，一平方キロ当りどれ位の密度までが輸出し，それがどこまでふえると輸入に転ずるかということから最大限の収容密度を算出した。それによれば

耕地一平方キロ当りの最大扶養可能人口は７５人

ステップ1平方キロ当りの最大扶養可能人口は4人

荒地1平方キロ当りの最大扶養人口は$\frac{1}{4}$人

となり，地球全体では，59億4,000万が最大限の扶養可能人口となる。したがつて1891年にほぼ15億だつた人口が，10年間に8%づつ増加すると，すでに2072年には59億7,700万に達し，人類の破滅が生ずることになると考えた。

8年後にフイルクス（Fircks）は，いくらか異なる見積りから，最大扶養人口を80～90億と割り出し，10年後にBallodは，180～190億をマキシマムと計算した。

これらによつても，見積りは"幾何級数的"に増加するが，人口は算術級数的にしか増加しないことは明らかである。けれどもともかく，ここに展開されている見通しは幾分容易ならぬものである。我々が近々200～300年間にこうした危機点に達するほど稠密になるとすれば大変なことに違いない。

だが，これらは数字の欺瞞である。

第一に，人口密度の最大限は，食糧輸入と輸出の事実からは導き出せない。大体食糧輸入国が食糧を輸入するのは，そうしないと飢えてしまうためではなく，また輸出国が輸出するのは，食糧が余つているから輸出するのでもない。むしろ文化の進んだ先進国が，自国の一人当りの生産が後進国よりも本来多いにもかかわらず食糧を輸入するのは，彼等がそれだけ豊かに生活できるからで，後進国が食糧を輸出するのは，余剰が彼等に不用だからではなく，もつと高級な文化財および生産財の輸入のために空腹に耐えねばならないからである。

第二に，一体地球全体の人口密度の限界がどの点にあるかということにつ

いては，なんらの手掛りもない。何故なら"最も集約的に栽培される"土地がどれだけの食糧を生産できるかについては全く知られていないから。
そして，今日もつとも人口稠密なヨーロッパの文明国の人口密度でさえ，外国の余剰を輸入しなくても，なおかなり高めることができるという事については，専門家の間になんらの異論も存在しない。

それ故一定のテンポという仮定があいまいなものであり，人口密度の限度が明らかでない以上，将来に絶対的人口過剰を想定することが無意味であることは明らかである。

このように批判したのち，オッペンハイマー自身の冗談に行なつた計算例をあげている。すなわち我々の身体を保持するのに75ポンドの蛋白質が必要であると仮定し（その他の栄養源は植物の内にあり余るほど存在するから問題にしなくてもよい）今日知られているもつとも集約的な食糧生産方法による控え目な見積りでも，一平方キロ当り30万ポンド以上が生産可能だから，一平方キロ当り4,000人が扶養できることになり，地球全体では現存以上の技術の進歩を考慮しないでも，ほぼ2,250億の人間を扶養できることになる。そしてこの数字は，ラペンシュタインの計算によつても，ほゞ3,000年後に到達されるにすぎない。これは，我々が今からびくびくするには少し遠すぎる将来の問題である。

以上のように，「数字で欺瞞する予言的マルサス主義には，いかなる論理的および事実的基礎もない。それ故また論理的事実的基礎にもとづいては反駁され得ない。これは不合理なるが故に信ぜざるを得ない様な信仰箇条と同じ部類に属するものである。」（1,053ページ）

β　"相対的過剰人口"

第1の変種はマルサス主義者とよぶよりもむしろ数字の詐欺師と呼ばれる

のにふさわしかつたが，少くともこれらの連中は過剰人口というマルサス的概念を時折存在する食物量と人口の間の不均衡と措定しているし，彼等の脱線は"傾向"という言葉を未来に存在する危険という風に解釈した点だけである。

同様な誤解が第二の変種の根底にも存在するが，しかしながら彼等の過剰人口という概念は，マルサス的概念から非常に離れた固有な概念である。つまり，マルサスのばあいは食糧と人口との不均衡が問題であつたが，彼等は工業生産と販売可能性との不均衡として解釈している。

ところで，この二つの問題は非常に性質の異なる別個のものであり，彼等がマルサス主義者と自称するのは明らかな誤解である。

しかしながら，次の二つの理由により，彼等の見解を若干くわしく検討してみることにする。第一の理由は，この種の見解が市民的講壇的経済学者の最良の頭脳によつて唱えられており（ワグナー，リユーメリン），第二に，この種の見解が今日の国際的ならびに国家的経済政策の基礎となつている。（たとえば，ドイツの農業保護，造船計画，植民政策は，かゝる自称マルサス主義に指導されており，支那，モロッコ政策，バクダット鉄道の敷設，"門戸開放"政策などは，すべてこのような第二の"人口過剰"の脅威によつて正当化されている。また英国の大ブリテン政策も同じような市場確保政策をとつている。）

ワグナー（Wagner）は，このような見解を，彼が"絶対的過剰人口"に関する理論と名附けた本来のマルサス主義から区別し，"相対的過剰人口"に関する理論となづけた。

相対的過剰人口というのは，ワグナーによれば，近い将来に工業諸国の生産力と，これらの諸国が売らねばならぬ工業製品に対する農業諸国の消化力との間に生ずる不均衡によつて生ずる過剰人口を意味する。

彼等は本来のマルサス主義やその第一の変種の様に，自然の吝嗇によつて

生ずる持続的な不均衡について危惧するのではなく，社会機構の改良可能な不完全性によつて生ずる一時的不均衡に対する危惧から出発する。とりわけ，彼等の主要関心事は，もしその買手が禁止関税によつて市場を閉鎖するならば，ドイツやイギリスの巨大な輸出工業はどうなるか，といつた国際的諸関係の紛糾に集中される。

もちろんかゝる可能性は存在しているが，それは一体どの程度のものなのだろうか？

「第一に，彼等の見解は余りにも非歴史的である。彼等は，実際にはその量的意味での増大のみが問題であるにもかゝわらず，輸出工業の出現を経済史における新事実として，つまり新しい苦悩として見ている。それ故彼等は現象に対する判断の尺度を失つてしまうのである。」（1,055ページ）

けれども，輸出工業の出現は，純粋自然経済の段階が克服され，お互いに孤立していた経済圏がたえずより高度の有機的な全体経済への絶えず進行する統合化過程の新局面以外の何物でもない。すなわち，従来の自給自足経済が崩壊して，農工分離，都市と農村の分離が生じて以来，ワグナーの考えているような販売可能性の問題は存在しているのである。

そしてまた西欧は，国際経済の観点からみて，法外に成長した都市の（すなわち工業生産物を輸出し，食糧を輸入する経済組織という意味で都市と同じ）立場にあるわけである。

それ故，彼等の提起する問題を検討するためには，近代国際経済の観点からみた"都市"（すなわち全西欧）に現存する扶養の困難性を新事実として見るのではなく，それを本来の都市，すなわちより小規模の都市と比べて見なければならない。「"都市的"経済の地域に対して充分な食糧を常に確保しておくことの困難は増大しているだろうか，それとも減少しているだろうか？

充分な商品を生産し販売することの困難は増大しているだろうか減少しているだろうか？　このような形で提起されたばあいにのみ，問題の妥当な解決が得られるだろう。」（1,056ページ）

そこでまず食糧供給の問題について考えてみると，食糧供給の際の政治的障害（たとえば戦争，暴動，包囲などによる供給困難）および経済的障害（たとえば不作による飢餓状態）などの今日全く考えられないことは明らかであり，歴史的にみてもこうした危険は減少しつつある。またこれは商品の販売についても当てはまる。すなわち，これもまた困難にはならず却つて容易になつている。まず商品販売のための前提である輸送可能性について考えても，それは市場の密度とともに増大する。すなわち，

① 運河，鉄道，汽船などの様な有力な輸送手段は，一般に人口が増加して必要労働力の広汎な協同が自由に行なわれるようになつた場合に用いられるようになる。

② 輸送業は有力な市場がそれを充分に利用するばあいにだけ採算がとれるようになる。

③ また輸送上の危険も，輸送範囲の拡大および商品輸送量の増大とともに比率から言えば減少する。

以上のような理由により，商品の輸送は市場の発展とともに容易になることは明らかであり，両者は相補的関係にあるが，つぎに商品販売そのものについてはどうだろうか。

「商品販売は市場の稠密化と共により困難になるだろうか」（1,059ページ）

まずこれを都市について考えてみると，都市で生産された商品販売の確実性，そしてまた都市の商品に対し充分な食糧が常に交換され得る確実性は，

都市が大きくなり都市経済の領域が大きくなればなるほど，すなわちその生産物の販売市場が拡大するほど増大する。つまり，より安定した価格でより確実に商品が販売され食糧供給が行なわれるようになる。そしてこうした傾向は，国際経済の形成とともに益々促進されることは明らかである。

だがこのばあいなお一つの疑問が残る。すなわち「このようなことは世界経済全体に対しては妥当するかも知れないが，個々の地域，たとえば全く輸出産業にのみ依存している様な土地についても正しいだろうか？　何か特殊な商品が何等かの理由で，たとえば新たに増大した商品量をさばくための新市場が開拓できないとか，古い市場を外国の競争者に奪われてしまつたとか言う理由で販売困難におちいることはないだろうか？」（1,060ページ）

これが予言的マルサス主義の第二の変種の最後の逃れ路でもある。だがこうした反論の不合理性を証明することは，いともたやすいことである。なぜなら，彼等は極端極まる形式的可能性，だが決して現実となることは有り得ぬ可能性を与えられたものとして仮定しているのだから。

だがそれはともかく，イギリスがかゝる最悪の諸条件の下に置かれたと仮定したばあいどうなるかを検討してみよう。イギリスが突然一夜の内に外国向け商品の全販路を失つたとすればどうなるだろうか。

このばあい，イギリスは自分の商品販路をもつぱら国内市場に限らねばならず，また自己の食糧供給を自国の農業生産に求めねばならなくなる。そして国内の食糧飢饉にともなう農産物の高騰は，農業や漁業を今迄よりもはるかに割のよい企業にするので，輸出商品の生産に使われていたり，またかゝる特殊事情の下であまり需要のなくなつた商品生産のために用いられていた資本や労働が，必然的にこれらの部門に投下されるようになり，また食糧の暴騰によつて，今までの耕地や漁場だけでなく，これまでは耕作の限界（漁

獲の限界）とされていた多くの土地や漁場も耕作され開拓されるようになり，かくてつぎの収獲期には，その成員のすべてを充分に満足させるに充分な大量の食糧品が生産されるようになるだろう。

つまりこのばあいに生ずることは，破滅的に変化した生存条件に対する国民経済社会の機構の急速な適応以外の何物でもないであろう。世界経済圏における"都市"としての地位から突然押しのけられ，イギリスはあらゆる経済社会に不可欠な均衡を，農業と工業との間にふたたび取り戻さねばならないが，その様な均衡は，価格変動によつて自動的に作り出されるものであり新しい均衡状態の成立後には人口収容力もふたたび充分となるだろう。もちろん，このような破滅によつてイギリス国民の生活水準はかなり低下するかも知れないが，それによつて人口の"過剰"部分の生存を脅かす様な絶対的食糧不足が生ずると考えるのは全く馬鹿げたことである。

以上「形式的にも極端で，実際には全く考えられないような，突然の完全な販路閉塞のばあいにも，マルサス的意味での"積極的障害"をともなう"人口過剰"が生じえないことを確かめたので，つぎに輸出工業の盛んな国で実際に生じうる危険について検討しよう。」（1,064ページ）

まず，以前の買手が生産者になつたばあいとか，外国の市場で新たな輸出競争が起つたばあいに生ずるような販売に対する持続的障害についてはどうだろうか？

このような危機は，国際経済の観点からすれば，部分的に生ずる過少消費あるいは過剰生産によるものであり，このような危機が存在することは明らかだが，それは絶対的人口過剰の結果ではなく，逆に一時的な相対的人口過剰の原因なのであり，またこのような危機の原因は，国民経済の適応の不充分さの内にこそ求められねばならない。またこのような危機は，輸出工業の

みにともなうものではなく，むしろ世界市場を対象とする輸出工業よりも，国内市場に限定されているような工業部門でより深刻であろう。そしてまた，このような意味の危機も，人口の増加によつて条件づけられている世界経済の発展，それに関連した市場に対する見通しの改善，価格の低下にともなつてかならず生ずる低位階層に対する販路の巨大な拡張，さらに世界の穀物収獲における最大と最小の変動巾の減少などの条件により，たえず減少するに至つていることは明らかである。

つまり歴史的にみても，輸出工業における商品販売の危機（販路の杜絶という危機）は，その可能性を減少しつつある。

ところで，「以上検討して来た彼等の見解は，非歴史的であると同時に非有機的でもある。」（1,067ページ）すなわち，彼等は工業の生産力を自由に成長し得るものと考え，一方販売市場を全く固定したものと考えているが，これは全く非有機的である。なぜなら，工業の発展と農村におけるその販売市場のあいだには，弾力的でしかも分離しがたい結合が存在しており，工業も農業もお互いの発展に相応して発展しうるものであるから。またこうした過程は，原始経済以来今日まで一貫して存在するものであり，輸出工業にともなう販売困難ということを，ことさら新事実とみてはならず，むしろ市場の拡大，市場の見通しの改善によつてかゝる危険は減少しつつある。
そして恐らく，今日工業生産物の販売困難が存在するにしても，かゝる困難自体が農業生産に有利に作用して，農業部門の購売力を拡大すると同時に農業生産そのものをも増大せしめるだろう。それ故持続的な販売困難などは考えられない。

また，工業がより大きな競争力を持つまでに発展した所では，それによつて食糧に対する国の需要が増加し，穀物価格も騰貴する。他方，工業部門の

市場競争が激化するような所では商品価格は下落する。それ故工業は，その成長自体によつて二つの面から食糧生産の収益性を高め，輸送費を低下させ，農業のために新市場を与えることによつて農業を発展させる。そしてこのために工業が何等かの窮境におちいることは絶対にない。なぜなら個々の商品の穀物換算価格が一般に下落するばあいにも，生産力はそれ以上に速やかに増大し，その結果，工業従事者は，よりよくまたより豊かな食糧供給に対し，年間総生産高のより少ない部分を与えればよいことになる。それ故，双方共に利益をうけることになるが，このような絶えず拡大した範囲で完成される統合化の過程のどこから工業生産物の持続的な販売困難が生じ得るだろうか。

結局第二の変種は，自己の市場独占に危惧を抱く特定の有力な工業集団の私的関心の表現以外の何物でもない。

D．人口法則を廻る論議によせて

以上は，「マルサスの人口法則」という，１９００年に出版されたオッペンハイマーの著書の要約であるが，この著書がでて以来２０年間に，これを廻つてマルサス説支持者の陣営から多くの批判が現われた。それらの内の主なものについて反批判を行なつたのがD節である。

ここでまず第一にとりあげられているのはブッジェ（Budge）である。

ブッジェの第一の批判は，Tendency という言葉の解釈について行なわれている。つまり彼は，マルサスによつて引用されているフランクリンの定則，すなわち，全ての生物はその扶養余力をこえて増加せんとする傾向をもつという定則は，オンペンハイマーがその内に見出した様な正確な幾何学的意味を持たないと主張する。彼は，傾向という言葉は何か将来予定されている様なあるものを意味しており，したがつて，傾向は原因で，扶養余力に対する圧迫は結果であるが，オッペンハイマーはこのような区別をしていない。

だがこのような区別の必要はないというのがオッペンハイマーの見解である。フランクリンのTendency という言葉は，何等将来的なものを指示しているのではなく，全ての自然法則の様に，常時あらゆる場所で作用するようなあるものを意味している。すなわちこれは法則なのである。したがつてマルサス的法則が正しければ，下層階級の賃金は生理的最小限に達するか，あるいは，絶えず達せんとする傾向を示しておらねばならぬことになる。もちろん，マルサスもこのような結果を指摘してはいない。だがそれは彼がこうした結果に尻込みしたからである。また，ブッジエやその他の支持者達が，マルサスが全くの最小限以上の賃金が可能であると考えていたことを証明したとしても，それは私の論争点にはかゝわりない。このような結論は，マルサス的前提の正しい理解からは生じない。

ブッジエは，第二てマルサス主義の三つの分類に疑問を呈する。とりわけ，ワグナー，リューメリンその他の「予防的マルサス主義の第二の変種」の解釈が本来の人口法則とは全く異なるものであるというが，マルサスの著作をもとにしたばあい，これとは全く逆の証拠もえられる。したがつて，マルサスの命題から現実に結果されるものを自ら確かめるという私の取つた方法の方が正しい。

第三の批判は，マルサスの収獲逓減の法則に対する，私の収獲逓増の法則に向けられる。つまり，収獲逓増の法則が事実とすれば，大衆の貧困が存在しているのは何故かという点である。

だが，これはむしろ賃金の問題であり，賃金の低下は，マルサスの説くように農業が自然的原因により充分な食糧を生産し得ないから起るのではなくむしろ賃金が社会的原因によつて低すぎるために，購買力がのびないから，農業が充分な食糧を生産できないのである。すなわち賃金の停滞が農業の生

産性の不足から説明されてはならず，農業生産の不足こそ賃金の停滞から説明さるべきであろう。ブッジエは，収獲の問題と賃金の問題を区別していない。

またブッジエは，食物生産が絶えず増大する社会的困難に直面しているという事実（すなわち，食糧価格の騰貴傾向）を，　彼等の主張の第二の論拠にしているが，たとえ物の社会的労働によつてあらわされる実質的価格が下落しても，貨幣によつてあらわされる名目価格が上昇することもありうるのであり，これをもつて，食物生産に対する社会的困難が増大しているなどとは言いえない。

次には，ベルンシュタインとポーレの批判がとりあげられている。

以前からマルサスの反対者は，マルサスに対し，マルサスの前提の下では都市人口の相対比率は減少せねばならない。何故なら，農業生産が逓減しているとすれば，その余剰によつて養われる都市人口も減少せねばならないから，という批判を行つて来た。私もこの点を批判したが，ベルンシュタインとポーレは，これはまつたく統計的錯誤であろうという。すなわち，都市化は農工分離の結果，今迄農村に居住していた非農業者が都市に集中し，また農業者の負担していた非農業的労働部分が都市居住者によつて営まれるようになつた結果であり，社会全体としてみたばあい，非農業的労働部分が以前よりも多くなつたとは言えないという批判である。

だが現実の都市集中が"統計的錯誤"だけで説明できるだろうか？　たとえばイギリスは，１７５４年に1,０６１万の人口を擁していたが，当時$\frac{9}{10}$が農村に居住し，農民の各々がその労働のなかばを工業的な副業に費していたと仮定すると，４００万の統計的錯誤が存在していたことになる。だがイギリスはバロッド（Ballod）の計算によると，1,８２１年にはほぼ2,１００

万，１８３１年には2,４００万の人口を擁していたので，1,７５４年以来1,０００万から1,３００万の人口が増加したことになり，しかもかゝる増加人口が全部都市への流入者であることは周知の通りである。したがつて上の統計的錯誤も，それが非常な過大評価であるにもかゝわらず，実際の都市化の一部しか説明できない。それ故マルサスに対する古い古された批判は，依然として有効なのである。

ところで，これと同じ論法を，ディーツエル（Dietzel）が農業生産性の問題について使用している。すなわち，農業の生産性が増大しつつあるか低下しつつあるかという問題を解くためには，直接の農業生産者の他に間接の農業生産者（農業用の機械，道具，肥料……を生産する人）が考慮されねばならず，このような間接的農業労働者を考慮に入れずに，収獲逓減の法則が働いているか否かを，農民と"都市居住者"との割合の変動にもとづいて判断してはならない。

だがもし社会の発展とともに，全人口一人当り少なくとも同量の食糧を生産するためには，全社会的労働力のより多くの部分（間接的部分をもふくめて）が必要とされるに至つたとしても（実際こんなことはありえないのだが）それは，高度の協業によつて成立している社会では，多くの労働力が間接的農業生産者として食糧生産者と協力するために配置される結果，収獲逓減の法則は補償されさらに逆転するだろうし，また，そのために食糧需要を充足するための手段の不足が生ずるようなことはない。

ここで問題なのは，社会の発展とともに，非農業者（間接的農業労働者および本来の工業労働者）が消費しうる余剰は増大したかどうかということである。そして，直接農業従事者ではない人口部分が，全人口よりも速やかに増加し，直接農業従事者よりさらに速やかに増加したということは，農業の

余剰が人口よりも速やかに増大したことの証明であり，農業の生産性は当然増大しているはずである。

要するに，資本主義社会の貧困は，マルサスおよびその支持者達のように，人口がその生活空間に無理につめこまれているといったことからは説明できない。

以上が本稿におけるオッペンハイマーのマルサス主義批判の概要である。オッペンハイマーの人口問題に関する著作としては，この大著に先立つてすでに1,900年に，Das Bevölkerungsgesety des Y.R. Malthus und der neueren Nationalökonomie, Darstellung und Kritik (Akademischer Verlag für Soziale Wissenschaften, Dv, John Edilheim, Berlin - Bern.) というマルサス主義批判のための独立の著書が刊行されている。本稿のIのA，B，Cは，この前著の圧縮再録という形をとつており，Dの「人口法則をめぐる論争によせて」で，Budge, Bernstein, Pohle, Dietzel などの前著に対する批判の再批判を行なつている。

本稿でのオッペンハイマーの論旨は，すこぶる明快なもので，資本主義社会における貧困の事実を，もつぱら人口悪に帰するマルサス主義的思惟の徹底的排除という立場で，マルサスおよびその亜流の批判を行なつている。このような観点からの批判の大綱は，すでにマルクス，エンゲルスのマルサス批判でその理論的基礎が確立されており，人口理論史上における新たな独創とみることはできないが，19世紀から20世紀への転換点におけるヨーロッパの社会経済的発展を背景として生じたいわゆるマルサス論争を，一人のすぐれたマルサス批判者の眼を通して再検討できるという意味で大きな意義をもつ。もちろん西欧の社会経済のその後の展開は，人口問題そのものの

実質をも大きく変貌させ，それとともに本稿でとり上げられているような諸問題も舞台の中心から退ぞくに至つた。そして問題をヨーロッパに限定するなら，むしろオッペンハイマーの楽観論が現実的な勝利をおさめたかのように思われるが，それにかわつて，第二次大戦後は，いわゆる低開発諸国における人口の重圧が，新たに大きな問題を提起して来つつある。マルサス主義的思惟の排徊する余地はなお大きく残されているわけである。

オッペンハイマーが本稿で提起した個々の論点の再評価が必要とされることは勿論だが，人口悪にではなく資本主義の社会機構そのものに人口問題の根源をみるオッペンハイマーの根本思想は，なお大きな現代的意義をもつものとして評価されてよいだろう。

II　本稿　オツペンハイマーのマルサス主義批判

（社会学体系３巻の下、社会経済、第二編、国民経済、第１１章資本主義、II資本主義の発展傾向のａ）およびｂ）1,０３０～1,０７９ページ）

II　資本主義の発展傾向

ａ）Sozialliberalismusの見解

重農主義及びスミス的な産業組織の立場に立つ人に、之等二つのたがいに関係の深い学派に於ては、この問題（注　資本主義の発展傾向に関する問題）に就いて全くの楽観説が支配していた。ケネーにとつては、悪しき状態の原因に関する知識さえあれば、権力を握つている人々にそれらの悪しき状態を除去しようという意慾を湧き起させその意慾を実行に移させる事が充分出来ると言う、いわばソクラテス的性向は全く疑いの余地のない確信であつた。それ故彼は〝開明君主〟の指導に依つて、自由な経済活動に対し政治的手段に依つて設けられた全ての障害を除去し得べき事を期待し、又その時堕落せる〝Ordre Positif〟から〝Ordre Naturel〟即ち社会機構の全ての部分の調和の状態が生れる事を瞬時も疑わなかつた。

アダム・スミスの解釈は斯かる見解を更に一歩推し進めたものであつた。彼はその自らの内的傾向に依り、殆んど抗し得ぬ力を以つて全ての障害に対し調和を取り戻させる様に働く、社会的諸力に就いて既に明確な観念を持つていた。彼はマンダヴィルの見解に刺戟されて、後にヘーゲルに依つて理念の狡智と呼ばれた例の労働に関するメカニズムを指摘しているが。それに依れば諸個人は自己の利益のみを追求するにも不拘、正しくそれに依つて勿論彼等が意識する事もなく彼等に依つて望まれる事もなしに、全ての利害の調和・富の増進及びそれと共に文明文化の発達が結果される事になる。彼はそれを社会経済的共同は物的生産の能率を高くべき程上昇せしめると言う、彼を有名にした新らしい見解に於て説明している。

そして斯かる楽観説が経済学から哲学に移行し、経済学自身が例のメカニ

ズムについて信じつづけたと同じ期間、哲学に於ても支持されていたという事実は精神科学的に重要である。そしてこの信仰にこそ啓蒙期の偉大なる思想家がその力を吸み出した源泉があるのであつた。と言うのはかかる信仰からのみ、自己規制的な超有機体である社会が、個人に対し彼の個性を政治的にも経済的にも宗教的にも精神的にも、全く思う儘に伸長せしめる自由を要求すると言う信仰。即ち凡ゆる形態の自由をば無秩序・害悪・衰退を齎らす邪悪な力と見做す中世の教会や新時代の絶対国家に反対して、自由をば秩序・幸福・進歩を生ぜしめる唯一の力と見做す信仰が生じ得たのであるから。

古典期の第二の時期に入り経済学がかかる信仰を失つた時、哲学も又それを失い以前よりも悲観的になつた。我々の時代の恐るべき分裂と混乱が、その最も深い根底に於て、宗教的信仰に代り得た唯一の例の（社会的調和に関する）信仰の喪失に依つて生じた以外の何物でもないと言う事は、我々の深く確信する所である。我々は既に資本主義的科学及び綱領と、共産主義的科学及び綱領との間に存する二律背反的対立が、市場と競争、換言すれば自由が存在する所には剰余価値、換言すれば搾取と無秩序が不可避的に存在せざるを得ないと言う、二つの立場に共通の前提に由来している事を指摘した。斯かる前提は個人的利害に依る自由な活動を通しての調和の成立に関する古典的学説に全く対立するものである。

私のこの著作全体は、最初の古典学説の信仰を今後論議の余地のない科学的確信に迄高め、それに依つて分裂せる人間に、その様な信仰がなければ人は個立化した相互に野蛮に振舞う個体となつてしまう様な信仰を再び与えると言う大きな目論見に依つて鼓舞されている。と言うのは斯かる共同の信仰のみが、仮令それ自身が一つの幻想に過ぎないにしても、単なる集合状態から、一つの民族、人類、を作り出すものであるから。

いさゝか横道にそれてしまつたが再び経済学の論議に立ち返つて見るならば、スミスの楽観説は生産のみならず、協同に依つて創り出された富の配分に関しても又当てはまるものである。スミスの既に前章に明らかにされてい

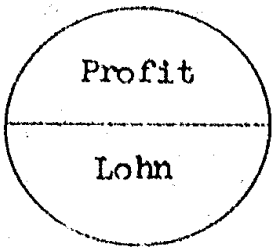
る賃銀理論は、労働者の賃銀が、彼等の為にそれ以前の生産期間に貯蓄に依つて蓄積された〝国民経済的意味に於ける資本〟の大きさに依つて決定される事を説いている。それは後に賃銀基金と呼ばれるものと同じ（御存知の様に全く確定し得ない）大きさなのである。それ故労働力の供給価格は、全ての物財と同様（人口よりもより急速に増大する）収益逓増の法則の下に置かれるから、明らかに協業の増大と共に賃銀は急激に又絶えず上昇せねばならないと言う結論になる。それ故分子である労賃部分のkは、分母をなす所の労働能力あり労働の意志を有するプロレタリアート仲間の数pよりも、より急速に増大せねばならない。

スミスの後に分岐した二つの市民的学説の内 Sozial-Liberale な傾向は、ケイリーとその剽窃者であるバスチアとに依つて受け継がれたが彼等は未来に対する楽観説の上に立つていた。

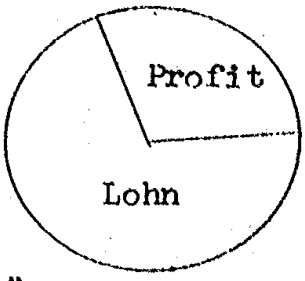
勿論ここで、最早現在では何人に依つても擁護されないアメリカ社会学の調和理論について、改めて学説批判を行う必要はなく、次の様な論述丈で充分である。

ケイリーに依つて既に唱えられた誤説は、地代が資本利潤の特殊な場合にすぎないという事である。それ故社会の総収益は二つの部分、即ち利潤と賃銀にのみ分割される。併し乍ら調達の主要法則（ Hauptgesetz der Beschaffung ）に依り総生産は人口数よりもより急速に増大するであろうし、それ故全ての関係者にはより多くの分け前が分配される。そして資本の剰前は絶対量に於ては確かに増大するが、併し乍ら相対量に於ては減少する。と言うのは資本即ち社会的生産物は、その生産費に応じて配分を受けるのではなく、之も調達の主要法則に依つて絶えず低下する再生産費に応じて配分されるから。従つて賃銀は絶対的にも相対的にも上昇する。即ち利害の調和が結果として生れる。

斯かる解釈は図示すれば次の如くである。



früherer zeitpunkt



späterer zeitpunkt

思い切つた表現を用いるならば、分配される食物は速かに増大しても、資本家は多くの食物からより少ない部分、我々の図に依れば半分の代りに与を得るに過ぎないが、この部分は、以前のより少ない食物のより大きな比重部分よりも多い。所が労働者はより多くの食物からより多くの部分を得る事になるのである。

b） Bourgeois－Liberalismus

ケイリー理論は既にスミスからわかれた市民的学説の第二の、悲観説の上に立つ解釈、即ちブルジョア経済学に対する攻撃反駁として考えられていた。

この（悲観説への）転換は、二重の心理学的並びに論理的な理由に依る。

心理学的には、ブルジョアジーが第三階級の指導者として封建的諸権力との戦いにより大ブリテンの支配階級の地位を継承し、今やかゝる事情の下では常にそうであつたしこれからも又そうである様に、彼が糾弾していた所のものを尊重し、彼が尊重していた所のものを糾弾せざるを得なかつた。今や彼等は昔に変らず搾取されている階級、即ち絶えずその数を増し、絶えず階級意識に目覚めつつあるプロレタリアートに対立し、その階級理論をば社会主義から守らねばならなかつた。

転換の論理的理由は、社会発展に関するスミスの予見が誤まりであつた事が明らかになつたからである。

疑いもなく大ブリテン社会は〝前進的〟であり、その資本所有はスミスが最も大胆に夢想したよりもより急速に増大し、ブリテン民族全体の頭数より

も、又特に労働者の頭数よりも恐しい程急速に増大した。それ故分子である労賃部分が分母よりもかくも急速に増大したのであるから、スミスの考えの通りならば賃銀は同様に増大せねばならなかつた。にも不拘賃銀は逆に下降したかに思われるし、都市では、事実農業労働者の大量移住によつてしばしば著るしく下降した。

かかる事情の下で社会主義は絶えずその勢力を拡大したので、支配階級に上昇したブルジョアジーもその階級理論を造り直さねばならなかつた。

我々はこの問題を今一度詳細に考察して見る事にしよう。原理的解釈に従えば、賃銀はただ資本供給と労働力供給との間の関係によつてのみ決定されねばならない。しかしながら斯様な事は明らかに事実に反する。と言うのは社会の総資本が労働者数よりも遙かに速やかに増大している事は否定出来ないが、それにも不拘賃銀は仮定されている様に上昇する代りに低下してしまつた。之を解決する為には競争の理論を全く放棄してしまうか、或いは補助的説明を試みねばならない。所で自由主義は第一の道を選ぶ事は出来ない、若しそうすれば、それは直ちに集産主義への移行を意味するから、それ故彼等は第二の補助説明に依らねばならない。

所で斯かる補助説明が如何になされねばならないかは基本的には明らかであつた。即ち資本供給は出来るだけ少なく、労働供給は出来るだけ多くなければならず、かくて賃銀の低下も説明された。

I　マルサス的変種：人口法則

マルサスはこの課題をば彼の有名な論議の多い〝人口理論〟に於て次の様に解決した。

彼は先ず社会的資本と言う不明確な概念をば、労働者の扶養手段と言う概念に依つて置き換えた。何故なら〝賃銀基金〟は結局賃銀取得者の扶養以外の何物でもない。彼等の賃銀は結局扶養手段よりなるものである。彼等自身の為に蓄えられている現金そのものは、扶養手段の社会的蓄えの表示以外の何物でもない。

斯かる扶養手段の内、食糧は第一に位するのみならず、更にその蓄えられた量に依つて仕事に就き得る者の数を最も妥当な線に制限する。住居，衣服その他は労働者階級に依つてある程度意の儘になるものであるが、若し食糧の蓄えが保証されていなければ最早彼等は生存し得ない。従つて我々は確実な根拠を以つて次の様に言い得る。即ち賃銀の決定的部分は食糧と労働者の数との間の関係に依つて決定される、と。

正しく一定の前提条件の下では、斯かる関係は労働者階級の他の生計部分、即ち食糧ではなく食糧よりもより必要度の少い財貨に就いても成立するであろう。勿論次の様な場合、即ち労働者階級の食糧への需要に対し不充分な供給しか与えられない様な場合、も起るかもしれない。この様な場合、無所有者は飢えない為に競つてその労働力を安売りせねばならず、従つてその賃銀は彼等の階級に取つての必需品、然も事情に依つてはしばしば生理的生存の為の最少限度に迄も圧し下げられるであろう。

正しく斯かる状態の下に於ては、マルサスの説に従えば労働者は所謂自然法則 — 我々がそれを人口扶養余力逓減の法則（Gesety des Sinkenden Nahrungsspielraum）と名附けた — の下にさらされている訳である。この法則に従えば人間の数は彼等の使用に供せられる食糧よりも常に且つ必然的により速やかに増大する。それ故無所有者は彼等の階級の必需品、場合に依つては生存の為の生理的最少限に迄その賃銀を引き下げられる。これは〝賃銀鉄則〟の原形である。

尚、更に斯かる逃がれ得ない宿命的な自然法則に依つて、社会は所有者即ち資本家と無所有者即ち労働者とに分離せざるを得ない。マルサスは彼と同時代に生存した社会主義者、ワルラス，オーエン，コンドルセー等々、の非難に答えて言う。我々は彼等の博愛主義的な夢が実現され、社会が全ての物財を等しく配分する様になると仮定しよう。だがその時には直ちに、斯かる理想社会を今日の市民的社会秩序の状態に引き戻す様な発展が始まり、それは短時日の間に完了してしまうだろう。人口は恐るべき速さで増加し、勤勉

で質素で真面目で天分豊かな成員は貯蓄を殖やすに至るだろうが、一方浪費家で怠惰でだらしのない成員は自己の財産を蕩尽し負債を作るに至る。又かつて平等に配分された土地も、こちらでは唯一人の相続者に譲られたかと思えばあちらでは沢山の子供に細分されてしまう。そして短時日の内に貧乏人は、金持に彼等が自分で所有しない食糧を譲つて貰れる様に頼み込まねばならず、又彼等の労働力を最低の賃銀で切り売りせねばならぬ様になる。と言うのは人口扶養余力逓減の法則に従えば、生活手段に対する需要はその供給の線を絶えず辿み超えずには居ないから。

若し斯かる恐るべき自然法則が存在しないならば、勿論逆に過剰な生活手段の所有者達は労働者の獲得の為に競争せねばならず、賃銀は上昇するだろう。

我々はこゝで本源的蓄積に関するあの古いお伽話が、ブルジョアジーの権利を正当ずける為に最も合目的的なものとして将来に対する予言に方向転換され、一つの学説に迄補強された事実を悟るのである。彼等の市民的経済秩序は斯くて先天的な永遠の範疇として現われ、彼等の事実上の優先権は自然必然性と言う背光を背負い、そして更に市民的な美徳に対する正当な報酬として宣伝されるのである。唯斯かる美徳の表彰版が僅かに補強されたと言う事、即ち倹約・勤勉・節制の外に、このブルジョア社会哲学の内に更に性的禁欲、少くとも子供を殖す事に関する禁慾、が加わつた事は、本来の意味では聖書に忠実な英国人の旧弊に対する攻撃であつたといえよう。

社会主義はそれ故その要求と期待とに於て、理論的には無邪気なお伽噺の妄信として、又実際的には（自然法則に対する）僭越な反逆としての意味しか持たぬ空虚な妄想と見做されるに至つた。人間の幸福・人間の品位・人間生活に対する恐るべき荒廃に対し、又当時利潤と言う神に対し数限りなく捧げられた犠牲に対し説明を要求する凡ゆる告発に熱狂した人々は、その言葉に依つて十字軍がアラビヤ人やユダヤ人を虐殺し近東地方全体を荒地に変えて了つた『神欲し給う』の現代版である。『自然がそれを要求する』と言う

叱咤の声の前には眉をすぼめて引つ込まざるを得ない。即ち１４才の子供の紡織機械の傍に於ける１日１４乃至１６時間の労働に対する責任、ロンドンやバーミンガムの様な大都市に於ける貧民窟の放任に対する責任、最も高貴な血統を有する民族全体の野蛮化、家畜化に対する責任、之等に対する全ての責任はマルサス説では、罪のない資本家の眉から責任問題を超越している自然えと眉代りされる。

尚その上、マルサス説はブルジョアジーに対し、之等の非難に逆ねぢを喰わせ、狼が羊よりもより高く評価される様な機会を与える。『一体何故貧困が存在するのだろうか？。現存する生活手段に比べて余りに沢山の人間が生れ過ぎるからだ。従つて労働者自身が自らの不幸の責任者だと言う事になる。若し彼が〝賤民〟言い換えれば文字通りの〝人間製造者〟でなければ、斯かる不均衡はそれ程著るしくなく彼等も又それ程貧しくもないであろう。彼等も我々同様遅く結婚し自分で養う事が出来る以上の子供を生み出さぬ様我々を見習うべきだ。彼等は自分の運命を自らの手に握つているのだ。』尊敬すべき社会的感情に満たされているディッケンスの小説の内に、我々はしばしば斯かるパリサイ人的な信仰告白の保持者が摘発されているのを知つている。之は全く薄気味の悪い社会哲学である。カーライルは、それに正当にも陰惨な科学（Dismal Science）陰惨な哲学（Dismal Philosophy ）と言う名前を与えている。併し乍ら義理固いブルジョアジーがその創作者に対し、数々の月桂樹や様々の価値あるものを与えて労をねぎらつたとしても何等おどろくには当らない。彼はブルジョアジーに対し、政治的ならびに社会的階級闘争における決定的な武器、即ち安らかな良心、正義は我等の側にありと言う感情をば与えたのだから。

ブルジョアジーは彼等に都合の好い結果に非常に喜んだので、今日にいたるもなおその根拠を検討する事を拒んでいる。百年以上もたつた今日でもなお、マルサス理論はブルジョア経済学ならびに殆んど全ての講壇経済学の支柱である。全ての階級がこのように考え行動している事実は何等驚ろくには

当らない。Wilhelm Hasbackは『理論は若しそれが人の望む所のものを証明するものであるならばたやすく受け入れられるものだ。結論に満足する者は誰でもその前提には喜んで満足するものだ。』と言つているが、これは全く普通にしかも確実に当てはまる言葉である。

イギリスのブルジョアジーやそして間もなく全世界のブルジョアジーは、マルサス説の結論の為に、吟味されていない前提や推理方法をも喜んで受け入れるに至つた。斯くて政治の為のパンフレット造りが偉大なる思想家の表彰版の末席に連なり、陰惨な似而非科学的な駄作が永遠の作品の序列に加わる事になつた。併し乍らこの著者が、著述家や学者に必要なあらゆる資格を全く欠いているのは明らかである。彼は何等事実に対する明瞭な思想を持たず、又事実の批判的取捨選択ならびに聰明な整理をもなし得なかつた。彼は無意味に拾い集められた事実を積み重ね、それを彼が抱いていた唯一の思想と共に一冊の部厚い書物につめ直したのである。この唯一の思想とは他のある思想家に由来する者であり、それ自体は正しい思想であるが、併しマルサスは之を全く誤まつて適用したのであつた。

A　人口扶養余力逓減の法則：絶対的過剰人口

マルサスの抱いていた唯一の思想は、フランクリンの自然哲学的観察に由来している。

この有名な自然研究家且政治家は、おどろきの眼をもつて自然に撒き散らされる無数の胚種を眺めた。種そのものを確実に存続させる為には無数の胚種と幼ない生物とが死滅せねばならない。フランクリンは言う。『若し地表に他種の植物が存在しないにしても、恐らく地表は唯一つの種類、例えば茴香に依つても蔽われて了うだろう。そして同様に地上に他の住民が住んでいないとしても、地上は唯一つの国民、例えばイギリス人、に依つて何代もたたぬ内に再び充たされてしまうだろうと言う事は間違いない』と。

之が " tendency of all animated life to increase beyond

the nourischment preparod for it〃であり、即ち全ての生物がその生活空間を超えて増加しようとする傾向である。

全ての採集経済の上に立つ生物に明白に当てはまるこの法則は、マルサスの著書を媒介として、かつて一世を風がし世人の思想を一変せしめた最も有力な思想体系の一つ、即ち生存競争を通しての最適者の選択に関するダーウインの理論に影響を与えた。すなわち彼はすべての生命は自らと同じ種のすべての他の生命、また更に他種に属するすべての生命と生存競争をしており、環境に対し最もよく適応する生命のみが生残り、その優れた性質を遺伝し、それによつて高級な種を創造するようになる、と主張する。ダーウインはこの思想がマルサスによつて影響されていると明言している。彼はその思想をば、すべての生命が幾何級数的に増加する能力を持つと言う風に解釈し、若し如何なる障害も存在しなければただ一対の象が2、3百年の内に、他に何等生物の生存していない地球上に溢れる程増殖するだろうという計算をしている。

マルサスからのかかる応用は明らかに正しいものであつた。その理由は簡単である。即ちダーウインはこの思想を野蛮な採集経済の上に立つ生物に対して適用したのだから。それに対してはこの法則は明らかに当てはまる。併し乍らマルサスはそれを、協業の上に立つ人間社会の文明の進んだ生産力の高い生活に適用しようとするのであるが、之に対してはこの法則は断じて当てはまらない。

Henry george はこゝに存する差別をかつて次の様な言葉で巧みに説明した。『蒼鷺も人間も鶏を喰べるが、蒼鷺が殖えれば殖える程鶏は減つて行くのに対し、人間が殖えれば殖える程鶏は殖えるものである』と。

マルサスは斯かる差異を顧慮しなかつた。動物や原始人は自然が彼等に用意してくれる丈のエネルギーの蓄えを利用するのみであり、彼等の食糧の調達の際には自然の内に保持されているだけのエネルギーを消費するに過ぎない。斯かる場合には個体の成長や種の繁殖を保証する為の剰余が充分に存在

すると言う事はほとんどあり得ない。併し文明人は巨大な地球のエネルギーの貯蓄を、彼が利用出来る様な形で取り出し、斯くて創り出された貯蓄を、自己のエネルギーのますます少い損失によつて利用出来る様管理する方法をますますよく学んでいる。一例を挙げるならば、蒙古は鶏を捕える為に1日中追い廻しているが、人間は鶏が速かに繁殖ししかも佳良な状態を保持できる様な条件の下で鶏を飼育する。人間は鶏に餌を与え、寒さや雨や自然の敵等の基本的な危害から鶏を防いでやる。そして時に応じて、大したエネルギーの消耗もなしに、卵や食用の鶏を捕えて来る事が出来る様に、自分の手の届く範囲に飼育して置くのである。

Oetwald はそれを次の様に表現した。即ち文化が進む程地球のエネルギー蓄積に対する人間の支配力は大きくなり、一方エネルギー源と利用エネルギーとの関係もますます人間に取つて有利になる。即ちエネルギー源の一定量が人間的目的のますます多くの部門に利用出来る様になる。

マルサスはこの点を見逃している。それ故彼は、文化の進んだ生産力の高い生物（すなわち人間）も『野蛮な採集経済の上に立つ生物と同様〃その生活空間の内に無理に詰め込まれている〃と考えるにいたつた。結局それはフランクリン・ダーウイン的法則とでも名附けられよう。それは要約すると、〃扶養余力を超えて増加しようとする恒常的傾向〃は、生物の数が食物量によつて全く規制されるが故に決して現実となる事はない。が現在の生活空間が各瞬間に現存の生物によつて一ぱいにそして窮屈な程に満たされており、新しい生物が生れて来ても、それは〃諸生物の食卓には彼の為の食事は何等用意されて居ないが故に死滅するか、或いは自分が生きる為に他の生物を生活空間から絶滅せねばならぬか、どちらかでなければならぬと言う事になる。

斯かる思想を文化の進んだ人間に適用すると言う事自体が馬鹿げた事である。何故なら人間の食物となる動植物も又幾何級数的に増殖する傾向を持つているし、事実普通には人間にくらべて高く程速かに増殖するのであるから。人間は生後15～20年を経なければ子を生む力を持ち得ず、而も平均して

僅かな子供を産むに過ぎないが、小麦や裸麦や牛・豚・羊・鶏・鷄鳥は一年目以内に繁殖する事が可能となり、しかも人間よりも恐ろしく多くを産み出すのである。斯かる状態の下で、如何にしてあの様に宿命的な不均衡が生じ得るかは全く考えられない。それは先ず地球全体が、人間によつて利用される動植物に対する収容力の最大限度迄みたされてしまつても、人間が幾何級数的に増殖しようとする傾向をなお持ち続ける様な場合に、こうした不均衡が生れるかもしれない。だがこのような時点は、それが何時かは到来するにしても見通し難い将来に横たわつているのであり、しかもマルサスが試みた様にかかる遠い将来の可能性で過去や現在の事実、すなわち資本主義の初め以来今日迄の賃銀の高さを説明する事は出来ないのである。

明日起るであろう事柄は、昨日起つたり、又は現在起りつつある事柄の原因にはなり得ない。

α） マルサスの論証

とにかく我々にはマルサスが如何にその驚くべき命題を論証しようとしているかを見てみる事にしよう。

彼は二つの論証方法即ち帰納的並びに演繹的な論証方法を提言する。彼の自称の帰納的論証は無批判に掻き集められた抜萃である。かかる全くの根気の産物に一瞥でも費す事は無駄な事であろう。それは何事でも証明されるが故に却つて何の証明にもならぬ無意味な道具にすぎない。

それに反し演繹的論証は確かにある取柄を持つている。それは脆弱ではあるが百年間もの間ケイリー、ロードベルトス、デューリング、マルクス、ヂョージ等を含む多くの卓越した攻撃者に耐え得た程巧みな脆弱の上に築かれていた。

マルサスは人口扶養余力逓減の法則をば収獲低減の法則の単なる系として展開した。

我々はこの法則を知つている。その内容はすなわち、他の事情を同一と仮

定するならば農業における協同が発展してもその収益は投下労働の増大以上には増加し得ない。あるいは換言すれば労働者１人当りの収益は減少するというのである。

かかる私経済的の収益性に関する疑問の余地ない法則をば、次の様な吟味を通して、彼は社会経済的生産性の法則に変形してしまつた。

或る経済社会の農用地の広さは全く一定のものである。更により高い観点よりするならば、人はこの地球の農用地をばある一定の大いさのものとして見る事が出来よう。『地球は一つの離れ小島と見做してもよい』とマルサスは言う。Ｘの人間がこの一定面積に於てｘ．ａ丈の食物を生産するとすると、２ｘの人間は収獲逓減の法則に従うならば２×（ａ－ｄ）の食糧を生産し得るに過ぎず、１人当りの食物量は人口の増加と共に減少する。マルサスはかかる関係をば、人口は幾何級数的に増加しようとする傾向を持つが生活資料は算術級数的に増大し得るにすぎないと言う風に表現しようと試みた。

一つの出発点として我々は特に高度の自然的豊饒性を保ちしかも人口稀薄な一領域を例に取つて見るならば、かかる地域では原料生産は一定期間は農業労働者１人当りに必要な生活手段の量より遙かに多くの収益を挙げる事が可能であろう。かかる諸事情の下では、マルサスに従うならば常にその生活空間を一杯に充たそうとする傾向を持つている人口は異常な速度で増加するだろう。それは恐らく２５年毎に倍増するであろうから、全人口１人当りの生活手段の量は減少し、遂には全体を養うのに丁度必要な量に迄それが少なくなる時点が存在せねばならぬ。そしてそれから後は、幾何級数的に増加しようとする人口の傾向が現実化される事は最早ないであろう、人口増加は食糧の緩慢な増産の様に絶えず止まらねばなるまい。だが実際は相変らず旺盛な生殖衝動の活動によつて是迄と同じ数丈の人間が生れて来ざるを得ない、がそうなればその後はしばしば現存人口の一部は過剰となり如何なる食物にもありつく事が出来ずに〝除去〟されねばならないだろう。斯様なやむを得ざる死刑執行人の地位に就くものは、彼があまりにも現実的に、人口増加に

対する〝障碍〟と名附ける神秘な騎士すなわち戦争、、悪疫・飢餓である。そしておまけに消極的障碍として繁殖能力を低下せしめる悪徳が加わる。

かかる不幸の魔女の輪から抜け出る道は唯一つである。人間は全体として適応する事を知らねばならず、〝道徳的抑制〟によつて自ら逃れでねばならぬ。人間はマルサスによつて全く抹香臭くもすべての悪の根源と見做された性慾を抑制する事を学ばねばならず〝禁欲〟せねばならない。無産者達は遅く結婚し自分で養える以上の子供を生み出さない為に、彼等の欲望をみづから抑制せねばならない。若し人間全体がかかる顧慮と抑制を行う様になり一般に道徳的抑制が消極的予防的な障害として全能的に作用する様になるならば、他の障碍の恐るべき活動は必要がなくなるであろう。

斯様な道徳的自己抑制を推薦する事にマルサスは明らかに熱心であつた様に見えた。子供の出産を制限するが性交を制限しない新マルサス主義的術策は彼の視野の外にあつた。

以上は又彼の有名な〝人口法則〟の論証でもある。そして事実若し我々が、マルサスによつてこゝに使用されている様な形における収獲逓減の法則を正当なものと認めてしまうならば、我々は人口扶養余力逓減の法則も又正しいものと認めない訳には行かなくなるであろう。そしてそれは土地法則の単純な系であり確かに妥当な適用であるに過ぎない事になろう。

だが幸運にも私が既に一度指示した様に、マルサスは誤つた形の土地収獲逓減の法則を出発点としてえらんだのであつた。それはただし〝同じ条件の下では〟と言う制限の下で妥当するに過ぎないのである。彼はかかる制限を机の下に隠してしまつたのであつた。

土地法則は農業経済における技術が不変である場合即ちSeniorや古典学派のすべてが言つている様に〝農業技術が一定の場合〟にのみ当てはまるにすぎない、そしてマルサス自身も他の場所でこの見解に同意しているのである。

土地法則は次の様な場合にも又無条件に当てはまる。我々は全く同じ肥沃度

と市場条件をもつ二つの同じ広さの農用地があり、A地では10人、B地では20人の同じ能力を持ち訓練をへた労働者が、同じ道具と同じ肥料等でもつて同じ穀物を生産していると仮定しよう。その場合より集約的に経営されている農地Bの総生産額は農地Aのそれより遙かに多いだろうが、個々の労働者1人当りでは総収益はAより少なく、企業家の純益も又Aより少ないだろう。

だが土地法則は次の様な場合には最早あてはまらない。我々は再び前と同じ土地を、Aは10人、Bは20人という前と同じ数の労働者で耕すものと仮定して見よう。しかし我々はBに対し、より高度の熟練度を持ち職業教育を受けた20人の労働者を選んで、彼らによりよい道具を与え肥料その他の改善された経営方法を利用せしめる事にする。その場合我々はBから生ずる1人当り粗収益及び純収益がAより少ないとは決して言い得ない。それはAと同じ場合もありむしろAよりも遙かに多い場合も有り得るだろう。

マルサスは大農の私経済的な利潤計算が支配する第一の場合から出発した。というのはかゝる経営ではより高度の技術もより経験に富んだ労働者もよりよい道具も利用する事が出来ないから。

併し我々がマルサスの如く成長する諸国民による社会経済的生産性の諸関係に就いて語る場合には、我々は第二の場合から出発せねばならない。その場合人口の成長は〝調達の法則〟に依れば、より高度の協同を意味し、より高度の協同はよりよく職業的に訓練されている労働者と、よりよい道具と、科学的知識によるよりよき自然の支配とを意味する。それ故、この場合には最早マルサス的演繹が展開される事は出来ない。

私経済的利潤計算は同じく予備訓練を受け同じ位の体格を持ち同じ用具（資本）を備えている労働者の能率を比較する。

所が社会経済的生産性の計算は異なつた予備訓練を受け異つた体格を持ち異なる用具を備えている労働者を比較する。この立場では、石片で砂の上に二つの溝を引く野蛮人の労働と、木鍬を用いる小百姓の労働と、更に開墾された沃土の上を力の強い牡牛に鉄スキを引か

せる農民の労働と、最後に何馬力もの蒸気スキを用いる機関手の労働とを比較する。この立場では種撒人の鍬布と条播機とが、石刀と草刈機とが、打穀台と蒸気打穀機とが、排水溝と組織的灌漑とが、焼畑における灌作と人口肥料による地力の肥沃化とが比較される。二十もの異なる仕事を持つ小百姓の労働能率と、ただ一つの仕事しか持たぬ今日の農夫の能率とが比較され、更に鋤を買う為に1月の労働を必要とする者と一週間の労働しか必要としないものとが比較される。

民族の人口が殖えれば殖える程、労働分化は進み、土地が耕される用具は完備し、本業の為の時間がますます多く副業から解放される様になる。それ故農用地の総収獲は増大するだろう。そして同時に工業人口の側に於ける農業生産物に対する需要と工業生産物の供給はますます増大するし、それ故同様に二つの面から農業の購売力とその純収益は増大する。

それ故〝同じ条件の下では〟という事は何等与えられているものではなく、我々は最早収獲逓減の法則をば人口扶養余力逓減の法則として語つてはならない。扶養余力が逓減するか否かという問題は抽象的な計算によつて解決される演繹的な問題ではなく、三つの場合が生じ得るであらう。

1. 土地全体に投下された労働がより多くの収益を挙げているにもかかわらず、その〝平均値〟は1人当りの配分量を以前の高さにたもつ為には充分でない場合。
2. 以前と同じ高さにたもつに充分な場合。
3. 1人当りの配分量を以前より高めるに充分な場合。

第1の場合が現実であるならば、マルサス主義はただ量的にやわらげられるだけで存続し得るであろう。第二の場合には収益逓減の法則は補償されるし、第三の場合には補償されて余りあるであろう。何れの場合が現実に存在するかは、最早不確実な数字によつてではなく確実な数字によつてのみ、換言すれば統計によつてのみ明らかにされるであろう。

（β） マルサスの主張

所で統計は第三の場合が現実に相応する事を示している。

収益逓減の法則は実際は充分以上に補償されて居り、１人当りの配分量は減少せず増大している。

１　人口の都市化

マルサスは農業生産統計が未だなお充分には整備されて居なかつた彼の時代に、統計的集団事実から、"都市集中"とか"都市化"とか言う概念に包括されている人口の内的運動を洞察し得たであろう。それはすべての文明諸国に於ける農業者の比率を減少せしめ、都市人口の比率を増加せしめる、都市や産業地域への人口の移動である。かかる過程が当時のイギリス社会を異常な力で変貌せしめて居り、マルサスはこの事実について彼自身の基本的見解から少し考えて見る丈で、彼の法則（＝人口扶養余力逓減の法則）が正当である事は有り得ないという結論を引き出さざるを得なかつたであろう。

若しこの法則が正当であるとしたならば、マルサスがフィジオクラット派から継承した農本的な根本法則により逆に都市居住者の割合は減少せねばならないであろう。

我々はある経済社会で、５０％の都市居住者が存在する時、換言すれば各農業者がそれぞれ二つの家族の為に食糧を生産するに至る時期に、１人当りの（食糧の）割前が減少し始める危機の瞬間が到達すると仮定しよう。今人口が更に増加するならば、個々の農民は彼自身の家族を扶養した後に、今迄よりもより少い食物しか、例えば彼の収獲の５０％の代りに４０％しか、売渡す事は出来ないであろう。その時には都市居住者の数は直ちに４０％迄減少せざるを得ない。都市で過剰な労働者は、そこでパンを求める為に農村を放棄せざるを得ない。

ところが全ての資本主義の発達した国では正しく逆の状態にあるのだから、農業における平均収獲は増大しているのでなければならない。例えばドイツでは１９世紀の始めには約２０％の、なお穀物を輸出していた１８７６年に

は約５０％の、今日では７０％以上の都市居住者が存在しており、その間に人口は２倍以上に増加した。それ故農民は平均して〝一定の土地〟に於ける異常な人口密度の増加にもかかわらず国民経済の初期には２０％を、国民経済の終期には５０％を、彼の収獲の内から都市人口の為に残して置いた事になる。我々はそれ故逓減する生活空間をではなく逓増する生活空間を持つている事になるであろう。

２　農業生産統計

たとえ根本的にではないにせよともかく直接的にしかも経済学の素人にも納得が行く様に、人口法則は、全ての先進的で人口稠密な諸国における農業生産統計により、可成り充分な権限をもつて反駁されるであろう。こゝでは比較は常にそして一義的に、食糧生産が本来人口よりも速やかに増加している事、あるいは換言すれば一農業者のみならず全人口一１人当りにつき生産された食物量は絶えず増加した事を示している。それ故この場合たとえしばしば生ずる穀物の高価格については語る事が出来ても〝食糧払底〟や、なおのこと飢餓について語る事は出来ない。

我々に身近に存在する例について述べるならば、ドイツでは人間の食糧に供せられる有効植物は、その生産が１９世紀に４倍になつたが、人口は２倍になつたに過ぎない。屠畜の数は、牛に就いては減り、人口１人当りの割前も増加しなかつたが、屠畜の重量は著るしく増加し、その成熟には余り時間を要しなくなつたので、１人１人の手に落ちる肉の量も又若干増加したと考えて差支えない。若し穀物が安くなり賃銀が高くなるならば、都市住民はより多くの肉を買う事が出来るだろうし、ドイツにおける家畜数が人口数に比べてもなお可成り著るしく増加する事に困難は存し得ないであろう。

マルサスが正常であると見做している様な諸関係、即ち食料生産の増加を上廻る人口の増大は一イギリスではそれは容易に説明の附く様な例外であつた一、輸送に対する政治的な障害と余りにも横暴な国家行政権の階級的独占が、大衆の欲求を高め協同を発展せしめる事を妨げている様な国家構造にお

いてのみ見られるものである。かかる構造の例は以前にはまず第一に、骨の髄まで腐敗し切つている土地貴族層により酷使され人為的な無智と鈍骨の許に置かれ、収奪され圧迫された土地であるロシヤであつた。ロシアでは、自然のよりよき支配を助ける事が出来るであらう全ての手段、例えば教養とか自由は、農民には拒否されるし、彼の為に少なくともよりよい用具を与える事が出来る様なもの、例えば貯蓄、は全て収奪されてしまつた。支配階級の利益の為の、馬鹿げた対外侵略政策と愚かな対内誅求政策が、それによつて国民を苦しめた国債の利子を調達する為に、農民は重税を課せられ、彼の耕地は疲弊せねばならないであろう。既に大戦前（第一次）に農民経済の脊椎である家畜の数は減少し、飢饉につぐ飢饉は人口を減少せしめた。

この場合には〝過剰人口〟即ち人口数と食糧との不均衡が存在するが、それはマルサスがそれに帰した様な原因によつて生ずるのではなく、社会主義者がその時代を弾劾する諸原因、すなわちかつていわれたような〝悪しき政治〟から、今日言われている様な欠陥の多い社会体制から生ずるのである。それ故この点についてはゴツドウインが正しく、ゴツドウインに対し彼の最初の短かいパンフレツトを書いたマルサスが誤りなのである。

今日でもなおマルサス説の支持者が誇らしげに、ロシアやロシヤと同じ様な政治的条件の下に置かれているインドやルーマニア等においても、明らかに存在したし今なお存在している様な過剰人口を指摘するのにしばしばぶつかるであろうが、我々はその様な場合、事実が問題なのではなく現象の原因が問題なのである、と反駁するのである。ゴツドウインはマルサスと同様、大ブリテンにおける資本主義的過剰人口の事実から出発した。だが彼等はただそれを別々に、即ちマルサスは自然的原因からゴツドウインは社会的原因から説明したのである。一体何が資本主義的貧困の責を負わねばならないのか？。自然の窮乏か？。或いは改良の望みのある人間的社会的諸制度か？。それのみが、問わるべき問題なのである。

さて大ブリテンについて検討して見よう。事実イギリスの耕地ではその人

口を養うに必要な食物の僅かな部分のみしか生産されず、大部分の人々がアメリカの小麦とオーストラリアの肉で生きている。

だがそれはマルサスの為に何物も証明しはしない。

何故なら先ず、こゝには〝過剰人口〟の現象は何等存在しないから。平均賃銀は単に貨幣においてのみならず財貨においても、名目賃銀においてのみならず実質賃銀においても、百年以上も前から疑もなくいちぢるしく上昇して来た。安楽や奢侈品の消費や寿命の長さや教養や貯金はそれに相応して高まり、貧困者の数は貧しい零落した西欧プロレタリアの沢山な移住にもかかわらず減少した。

第二に農業生産のいちぢるしい相対的減退の事実そのものは、その原因についてなお何一つ説明しはしない。大ブリテン人が穀物を輸入するのは、彼等の農業がその土地で可能な収益性の絶対的な最高限度にまで到達してしまつたためと仮定するのは全く無意味であろう。そうではなくイギリスの農業が後退したのは、現存の農業における所有関係の下では最もよい土地以外では儲からないからである。英国人は一般にその資本と労働とをば、農業に投下せずに工業に投下する事を好んだのである。大ブリテンは経済的な意味では世界経済圏の〝中心都市〟である。

どこか他の地域から穀物や肉を輸入する事実から、彼等が若しそうしようと思つてもそれらのものを生産できないのだという事は結論されず、むしろその前に彼がそうしようと思つても、換言すればそれがひき合う場合にもそれらのものを生産出来ないのか、それともより多くの小麦と肉を生産する、すなわち彼等がヤヤラコや靴刷毛を小麦や肉と交換するばあいに、それらのものの消費に対しより多くの小麦や肉が市場にもたらされる様な〝都市〟に変る事を全く好都合と考えてはいないかと言う事が明らかにされて居らねばならぬ。

人口理論はそれが農業の生産性及び技術的可能性に関する法則である限りにおいて収獲逓減の法則に支えられているが、それが農業における利潤及び

経済的可能性の法則である限りにおいては、人口理論は何等それに支えられはしないのである。今日の収獲は私的経済の主体による利潤計算の結果であり、国民経済的な生産性の問題については何も証明する事は出来ないのである。

B　予言的マルサス主義者

以上で本来のマルサス理論は論破された。彼等は資本主義地域における過去及び現在の大衆の貧困を所謂人口扶養余力逓減の自然法則から説明した。

ところでこの法則は自然法則として、重力の法則の様に常に作用するものと考えられるから、マルサスは若し慎重なそして道徳的な抑制が人口増加を抑制しない限り、現在と同じ、あるいはなお悲惨な大衆的貧困が将来も又起るであろうと予言した。しかしながらこれは法則のあらゆる時代に対する普遍妥当性の特殊な適用に過ぎない。

それにもかかわらず人口法則を予言としてのみ解釈しようとする二つの学派が存在する。

両者がかかる誤つた見解に到達したのは、彼等が〝傾向〟という言葉を誤解していたからである。彼等はそれを（傾向を）将来的な何物かとして通俗的に解釈しているが、偉大なる頭脳であつたフランクリンによるとそれはあらゆる時代に対し現在的である正確な数学的表現であつた。すなわちあらゆる生物は常にその生活空間を超えて増加しようとする傾向を持つているが、同時に彼等の数が生活空間の大きさに従つて制限されている為にそれを超える事は出来ない。

それは、遊星は常に天空に向い飛び去ろうとする傾向を持つているが、重力がそれを中心に向つて引つ張つているが故に飛び離れる事は出来ない、と言う事実と同じ事である。

a　数字によつて偽瞞しようとするマルサス主義者

二つの学派の第一は、多かれ少なかれ遠い将来において地球の〝絶対的〟

過剰人口が予想されると説く驚ろくべき奇人達から成つている。だがこの珍妙な観念について我々はあまり心を悩ます必要はない。と言うのは我々には過去および現在の資本主義的分配の解明が問題であり、これを将来の人口過剰から説明する事は不可能であるから。ともかく我々はこの人達について、一面方法上の誤りというものが著名な思想家の場合にもまたしばしば生じ得るという〝恐るべき実例〟を示して見る為に、他面全ての異議に決着をつけて置く為に、簡単に触れて見たいと思う。

というのは多くのマルサス主義者達は、若しその予言が証明されるならば、現在や過去についても最早如何なる説明をも必要としない、と考えているから。

私が〝数字で偽瞞する予言的マルサス主義者〟と特徴づけたところのかゝる変種の支持者達は、もつぱら全ての人口は、現在何等かの程度において増加しているという周知の統計数字に基礎を置いている。

それは、かかる統計数字を１本の直線の一端と見做し、人口はその将来の全期間にわたつて一定の速度でさらに増加し、遂には地球全体を考え得る最大の密度で蔽うようになるが、その時には食糧の割前は少なくなるであろうと、無造作に結論する。

だが若し人がこれと全く同じ数学的計算を、未来に対して行う代りに過去に対して行うならば、全く馬鹿げた始源の数字に到達する事は何人といえども逃れ得ぬところであろう。

１９０３年の〝Münchener Neuesten Nachrichten〟の謝肉祭号はかかる計算をば愉快なあてこすりとして行つている。

『一つの驚くべき発見がワルデマール・シュピッツコップ（Waldemar Spitzkopf）教授によつて〝Blättern für Unbefangene Wissenschaft〟に発表された。彼はその内で、人間は急速に死滅せんとしつつありそれは単純な数学的計算に基づくものである。明らかな様に各々の人間は２人の両親しか持たぬが、しかしその上には４人の祖父母、８人の曾祖父母、

１６人の曾々祖父母・・・を持ちついには数百万の先祖にまでいたる。それ故以前には地球上には現在より少ない人間しか住んでいなかつた、というとれ迄の仮定に反し、むしろより多くの人間が住んでいた事になる。すなわち若し一世紀が三世代と勘定されるならば百年前には現在の８倍の、二百年前には６４倍の人間が住んでいた事になる。」

だが将来に向つてなされる計算も、過去に向けられた計算に劣らず喜劇的である。我々が使用出来る短かい数字の列から何等かの結論を引き出そうとするのは、全く許し難い専横である。我々は過去における出生超過に就いても、同様に将来における出生超過に就いても確実な事は何も知らない。我々は、我々の使う統計数字が引き出される時期が、普通の時期であるかそれとも例外的性格を持つているかに就いては何も知らない。

我々は文明諸国民がほぼ百年以来増加していると言う事以外には全く何も知らない。

厳実に道を歩み空想に溺れない科学が、こゝで何等かの予言を行う事は不可能である。

若し人があくまで将来に就いての臆測をめぐらそうとするならば、まさしく、事実人口はたえずますます増加し遂には地球が蟻の塔の様に密集して、戦争、ペスト、飢饉あるいは思慮ある自己抑制のみが人間を餓死から救う事が出来ると考える事も出来ようが。しかし人はそれが詩ではあつても何等科学ではない事を明らかに自覚していなければならぬ。

そしてまた人は他の如何なる臆測もこれと同じ位の価値しか持たない事を明らかに知つていなければならぬ。同じ様な権利をもつて誰でも、化学がそれ迄に石をパンに変える方法を編み出し、人類が新しい世界へ移住する方法を発見するなどと想像する事も出来よう。

だが我々は断じてかかる妄想にとらえられる必要はない。我々はマルサス主義に対して、少なくとも同じ位もつともらしさを持つ他の仮定を作り出す事も出来る。我々は皆さん御存知の成長の概念に味方しさえすればよい。た

とえば我々は、生物体はそれが若い程速く成長するし、その量的増大は成長する生物体が、彼に許されるだけの大きさすなわちその生物体の扶養余力の従属函数である大きさに迄到達した時、その極大点に到達する、ということを知つている。我々は今日最早シベリヤで一頭の厚皮類をも見出し得ない、何故ならそれらはシベリヤでその扶養余力を最早持たず、それのみがかくも巨大な生物体に扶養余力を保証できる、大トカゲは石炭期の大森林と共に死滅してしまつたから。

際限なしの成長という反対の仮定は、人が『ある小さな犬の尻尾が二倍にのびる時には、しかじかのポンドだけ重さが重くなるという事情から、犬の目方が50ポンドになつた時には尻尾が一哩以上にも伸びて尾を振る事も難しくなるから、ひんぴんと切断されるという積極的抑制に対する唯一の二者択一として繃帯を巻いてやる予防的制限を命じなければならぬ、という甚だ奇妙な結果を求めようとする』（H. goorge）場合と正しく同じだけの価値を持つ。

さて最近百年間の産業諸民族をば、第一の異常な成長の段階にある生物体として観察するには何等の支障も存しまい。マルサス主義の基礎となつている統計はほぼ鉄道や蒸気汽船と同じ位の古さのものである。之等の発見により強力に拡げられた領域から生活資料を供給する可能性が、諸民族の人口収容余力を突然著るしく拡大したという事は明らかではないであろうか？。この事から近代的諸民族は、その平均を遙かに上廻る増加と共に、斯様に拡大された人口扶養余力の内で成長したと結論する事は、不可能であろうか？。

前述のようにかゝる解釈も又立証できぬものではあるが、それは同じく立証出来ないマルサス的解釈よりも本当らしくないものであろうか？。かゝる解釈は、人間の歴史が始まつて以来少なくとも7千年間の歴史的事実によつても人類はこの地球をマルサス説の言う様に蟻の塔の様にはしていないという事実に一致してはいないであろうか？。

その上マルサス主義にはなお、裕福な人間は貧乏人よりも少ない後継者し

か持たぬものだという周知の経験による反対が存在する。それが〝道徳的〟或は他の方法による〝自己抑制〟の表現であるかどうかは人は知る事が出来ない。恐らくそれは、生存の為の戦いにおいてその存在を著るしく脅かされている種はすこぶる多産であり、時に著るしい消耗に曝されている器官は、増殖によつてその主要部分を非常に速く改新するという一般的法則の表現であろう。それ故その名を自らの子供の数に負つている〝プロレタリア〟も又〝増殖する〟それは〝適応〟の普及された方法の一つである。斯様な適応はしかし乍ら、それがその結果であつた外的要求の消滅と共に普通は消滅する。穴居動物の眼が、それに適応して備つていた光と共に消滅したと正しく同様に、過剰な生殖力は生活に対する脅威の減少と共に恐らくは晩婚化により、女性の卵巣の脂肪過多により、安寧に伴う理性の欲望に対する、すなわち頭脳の性欲に対する優越により消滅するであろう。しかしながらこの場合メカニズムはどちらでもかまわない、ともかく経験と統計とは今日既に斯様な発展が〝蟻の塔〟よりも真実に近い事を語つている。

しかしながら我々はもつぱら、そんな必要は毛頭ないという事が眼目なのではあるが、之等二つの予言についてどちらがより多くのもつともらしさを持つて居るかと言う事に頭を悩まして来た。最悪の悲観論者が真実であると思い込んでいる様に、人間が一定のテンポで増加すべきであつても、その場合でさへも〝絶対的人口過剰〟の時期ははるか彼方にあり、我々は今日においては少なくとも、それから生ずる悪夢にのぼせる必要はないのである。おそるべき瞬間が非常に近いと思い込んでいる逆の見解は全くグロテスクな前提の上によつている。とにかく我々はただそれがこの印刷用紙を退屈で埋めるだけであつても、若し科学的論証にそれが利用されて居るのならばそれを簡単に特徴づけて見る事にしよう。そして仕事は統計と共に始められねばならぬ。

１８９１年にイギリスの地理学者 Ravenstein は王立地理学会の前にロンドンで行つた講演において危機の瞬間を計算している。彼は先ず恐らくは

正しく、地球の利用可能地域を、ほぼ7,３００万平方キロをば肥沃な土地、３6,０００万平方キロをばステップ、１0,８００万平方キロをば荒地と見積つている。ところで１平方キロ当りでどれだけの人間が扶養できるか？。さしあたり耕地ではどれだけの人間が養えるだろうか？。

ところが明らかにより確実な手掛りがある。地上には食糧を輸出する国があり又輸入する国がある。明らかに前者は過剰な食糧を持ち後者は過少な食糧を持つ―少なくとも経済学者達はこれ迄その様に考えて来た。それ故我々は１平方キロ当りどれ位の密度迄は輸出し、又逆に輸入する様になるかを見る事にする。そしてその中央値がほぼ最大限の密度と言う事になろう。そこで斯様にして Ravenstein によれば、耕地（１平方キロ）当りの扶養人口数の最大値はほぼ７５人、ステップでは４人、荒地ではほぼ1/4人と見積られる事になる。斯様にして地球全体に於ける収容可能の最大人口は５９億９千４百万という事になる。

そして１８９１年にほぼ１５億であつた人口が、１０年間平均８%づつ増加すると、既に約2,０７２年には５９億７千７百万に達し、大いなる破滅が生ずる／。

８年後にベルリンの統計家 V. Firoke はこのイギリス人による計算を検討し、若干異なる見積りの根拠から、最大限度数を８０～９０億と算出した。そして更に１０年後 Ballod はマクシマムを１８０～１９０億と算出した。之によつても、見積りが〝幾何級数的に増加するが、人口は算術級数的にしか増加しない〟事が明らかである。

ともかくも、こゝに展開されている見通しは幾分容易ならぬものである。若し我々が２００～３００年間に危機点に達する程稠密になるならば、その場合には確かに何事かが起らねばならない。だが我々は事実かゝる危機に直面する程稠密になるのだろうか？。

考えるには及ばない／。こゝではただ数字で冗談が行われているに過ぎない／。比例法は仲々鮮やかなのだが、ただ見積りが間違つているだけなのだ。

人口密度の最大限は、食糧の輸入と輸出の事実からは導き出せないものなのである。

我々はその上、（世界に於ける）〃都市〃として今日既に圧倒的な輸入食糧によつて生活している大ブリテン人について、彼等がそうしようとしても自分達の食糧を生産出来ないだろうと言うことは出来ず、むしろ若し〃ヤヤラコや靴刷毛〃の代りに穀物や肉類を生産する事が英国人達に概して割のよい仕事になるならば、今日でもなお充分に自給できるだろう。しかしながら我々は大ブリテン人の事はしばらく傍に置くとしよう！　若し統計家達が生産統計を丹念に眺めたならば、彼等は決して、ある民族は彼等がそうしなければ飢えねばならないために食糧を輸入するとか、他の民族は食糧が過剰であるために輸出するのだとかいう見解を持つにはいたらなかつただろう。

たとえばドイツでは大戦前、国内生産の内から未だ穀物を輸出していた19世紀の70年代におけるよりもはるかに増加した人口1人当りに対して、はるかに多くの穀物を生産した。当時はそれでもなお1人当りでみて、以前よりはより少い部分が輸出されていたが、後（大戦後）にはそれよりより多くの消費量に加えてなお多くの部分が輸入された。そして事実我々はロシアの穀物を非常に沢山買入れているのだが、比較して見るとロシアよりも我国の国内1人当り生産量の方が多い事になる。そしてそれにもかかわらず我々は買い彼等は売るのである。本来から言えばそれは逆でなければならぬ！。之は如何にして説明されるのか？。

すこぶる簡単である。文化の進んだ諸国は、自国の人口1人当りの生産が文化の遅れた諸国よりも本来多いにもかかわらず、食糧を輸入する。それらの諸国は通俗の言葉を使うならば、『働らきがあるから』輸入するのである。すなわち彼等はより豊かによりよく扶養され得るから、又輸入穀物の大部分を〃贅沢食品〃に言い換えれば極上の肉製品と酒精飲料に換える力を持つているが故である。之に反し後進国が食糧を輸出するのは余剰食糧が全く彼等に不用だからではなく、彼等が貧しく債務を持つている為であり、債務利子

を支払う為に節約せねばならないためである。すなわち少なくとも若干のより高級な文化財と生産財をば自国にもたらす為に空腹に耐えねばならないのである。

これだけの知識からでも、Ravonstoin 的 Firoks 的 Ballod 的計算の基礎が全く支持され得ぬ事に如何なる疑いも存し得ない。我々は、一つの文化圏の内の個々の地域の内で何処に、況んや地球全体についてどこに人口密度の限界が存在するかと言う事について何等の手掛りも持つていない。何故なら我々はフイルクスがリカルドと共に述べている様に〝最も集約的に栽培される〟土地がどれだけの物を生産し得るかに就いてなお全く知らないからである。いづれにしても最も人口稠密なヨーロッパの文明諸国の今日の人口密度が、外部諸国の収獲余剰をその食糧として要求しなくても、なお全く著るしく高められ得るものである事に就いて専門家達の間には如何なる意見の相違も存在しないのである。

それ故かかるラベンスタイン的見積りをこれ以上追求しない事にする。一体どこから我々はせいぜい養い得る1平方キロ当りの人間の頭数を割り出すのだろうか？。

私は冗談に次の様な計算をして見た。我々は自分の身体を保持する為に1人の人間がどれだけの蛋白質を摂らねばならぬかを知つている。すなわちそれは概ね75ポンドである。[1)]

1）最近の多くの生理学者は、Voit と Pottenkopfer のこの算定は、かなり多すぎるという見解をとつている。

1平方キロ当り75ポンドの蛋白質の何倍かが生産され得るとすれば、その何倍かの人数だけは扶養し得る。というのは他の全ての栄養源は植物体の内にあり余る程存在するから。さて我々が今日知つている最も集約的な食糧生産による蛋白資源生産に対する控へ目な見積りによつても、1平方キロ当り300,000ポンド以上が生産される事になり、それ故75人ではなく1平方キロ当り4,000人が扶養され得る事になる。そしてそれ故地球全体では

これ以上の技術の進歩を勘定に入れる事なしに、ほぼ2,250億の人間を扶養できる事になり、この数字はラペンスタイン的見積りによつてもほぼ3,000年後に到達され得るに過ぎない。そしてそれは、我々が今からびくびくそれについて心配しなければならぬにしては少し遠すぎる問題である。我々は斯様な心配を全幅の信頼をもつて、かゝる〝危険〟にぶつかるには時間を充分持つているであろう今から数千年後の政治家に残して置いてもよいであろう。

若しマルサス的悲観論者の予言がただしいとするならば、若し温室にかへられた地球上に絶対的人口過剰の最初の兆しが現われねばならぬとすれば、それに関する最初の徴候は〝積極的抑制〟や死亡の増加等々あるいは絶対的飢餓では全くなく、これ迄規則的であつた（生産の）カーブにおける奇妙なヒヾ（Knick）であろう。これまで規則的に低下して来た食糧生産の比率は上り始め、その時今から数千年後の政治家や国民経済学者は、いかにして余計すぎる出生頻度を統制し得るかに就いて頭を悩ますであろう。

数字で偽瞞する予言的マルサス主義には如何なる論理的事実的基礎もないし、それ故又論理的事実的基礎によつて反駁され得ないのである。これも又不合理なるが故に信ずという信仰箇条の部類に属するものである。

（β）〝相対的人口過剰〟

予言的マルサス主義の第一の変種にあつては科学的精神から喜劇的脱線が問題であつたが、第二の変種では逆に科学的精神の過剰が妥当する。

確かに第一の主義者はマルサス主義と呼ぶよりも、むしろ数字の詐欺師と呼ばれるのにふさわしかつた。だがこれらの連中は少なくとも過剰人口というマルサス的概念を、時折存在する食物量と人口との間の不均衡として措定している。彼等の脱線は〝傾向〟と言う言葉を未来に属する危険という風に解した点にあるに過ぎない。同様な誤解は予言的マルサス主義者の第二の変種の根底にも存在する。しかしながら彼等は過剰人口という概念を、マルサ

ス的概念から非常に離れた固有の概念として持つている。マルサスの場合には食糧と人口との不均衡が問題であつたが、彼等はそれを工業生産と販売可能性との不均衡として解釈している。

これらは明らかに非常に異なる別個のものであり、この思想の支持者がマルサス主義者と自称するのは明らかな誤解である。

それでもなお我々は彼等の見解を若干詳しく検討して見る事にしよう。というのは第一にそれは市民的・講壇的経済学者の最良の頭脳によつて唱えられて居り、— Adolf Wagner Rühmolin がその内に含まれる—、第二にはそれが正しく今日の国際的並びに国家的経済政策の基礎であるから。とりわけそれ（第二の変種の見解）は国家支配者の行動を規定し、政党の志向を方向づけている。それは少くとも明確な階級政治の善意の是認である。わがドイツの農業保護、我々の艦隊政策並びに植民政策は全くかゝる自称マルサス主義に指導されていた。一方においてドイツの止め難い農業国から工業国への発展に少くともブレーキをかけ、他方工業生産物の量的増大に対して販売市場を確保しようとする試みは全て、この支配的思想の下に立ち還らざるを得ない。我々の支那およびモロッコ政策、我々のトルコに対する態度例えばバグダット鉄道の敷設、〝門戸解放〟を唱へる我が世界強行政策、大ブリテンに対する反対—これ等は全てかゝる別様の〝人口過剰〟の脅威によつて正当化された。そして更に同様な観念が他の成長しつつある諸国を支配した。すなわち英国の大英国政策は自国の工業的余剰に対する閉じられた確実な市場を確保しようとしているし、その弩級戦艦は我々の政治権力よりもむしろ我国の輸出をねらつているのである。

ワグナーはかかる見解をば、彼が〝絶対的人口過剰〟に関する理論と名附けた本年のマルサス主義から〝相対的人口過剰〟に関する理論として区別した。彼は近い将来に工業諸国の生産力と、これら諸国が売らねばならぬ工業製品に対する農業諸国の消化力との間に不均衡が生ずるであろうと予言した。だが彼等は本来のマルサス主義やその第一の予言的変種の様に持続的な不均

衡に就いておそれているのではなく、一時的不均衡をおそれたのであつた。そしてその原因を、彼等は、前の二者の様に自然の癒し得ぬ窮乏にではなく、社会機構の癒し得る不完全性の内に見たのである。要するにその理論は、マルクス主義的社会主義が普通資本主義的経済現象の責に帰せしめようとする所謂〝生産の無政府性〟の特殊な場合をば近い将来に起り得べき事として選り出したのであつた。即ち、マルクス主義が国際間においてのみならず国内生産についても、その無政府性を指摘するのに、相対的過剰人口説の支持者達は専ら、国際的諸関係において生じ、本来は政治的理由、すなわち支配階級の利害、時に輸出に対する利害関係者の利害を背後の推進力としている力の敵対関係、から生ずるであろう紛糾についてのみ考える。たとえば、若しその買手が禁止関税によつて市場を閉鎖するならば、ドイツやイギリスの巨大な輸出工業はどうなるか？。それがこれらの政治家や経済学者の主要関心事なのである。

全く明らかにかかる可能性は存在して居り、そしてそれが（かかる可能性が）若しいつも生ずるとするならば確かに由々しき事態は避け難くなるだろう。それ故我々はこの亡霊をばよく眼で確かめて見よう！。

第一に予盲的マルサス主義のこの変種に対しては、それが余りに非歴史的であるという非難がなされ得る。それは実際はその度合の強すぎることだけが問題なのであるが輸出工業体制をば経済史の新事実として、又新しい苦悩として見ている。そしてそれ故彼等には現象の判断への規準が欠けているのである。

ここで問題なのは、一般に純粋自然経済の段階が克服されて以来間断なく行われている強力な諸過程の新局面、すなわち以前はばらばらだつた経済圏のより高度に組織された（より高度に分化せる）全体経済への絶えず進行する統合の諸過程の新局面以外の何物でもない。その過程は村に居住する大工や職工が食糧生産をやめ、それに対して食糧を〝輸入する〟ためにこれ迄自足的だつた経済圏から工業製品を〝輸出する〟事から始まつた。それは本来

の意味における最初の〝都市〟に、すなわちその近隣農村を統一的な都市経済に統合する為に田舎につくられた〝工業都市〟へと発展した。そしてそれから多くの都市経済は一つの国民経済に吸収され、それらを束縛するのではなく、むしろ、地球全体を経済的統一体として唯一つのもつとも精功に分化し、もつとも大規模に統合された世界経済へと融合せしめる明瞭な傾向をともなつて今や国際経済への道に向つて更に大きな前進が行なわれている。

今や全西欧は国際経済の内に包括されており、時に大ブリテンやドイツは法外に成長した〝都市〟対い換えれば工業品を輸出し食糧品を輸入する様な経済組織の立場にある。そしてこのような観点からのみ諸関係は正しく評価されるのである。

人がこの場合、イギリスやザクセンや更に全西欧が今日〝都市〟である事を明らかに知るや否や最早彼のおそるべき幻影の全ての確証は失われる。最早誰もロンドンが１３７７年には３５,２００人の住民が住んでいただけなのが今日では恒常６００万の住民を抱えて居り、ベルリンが１８３１年から１８８８年の間に２２万から１４３万８千へとその人口を増大し、更に大ベルリンがそれ以来３００万以上の住民を増加している事実の内に何か由々しき大事を見ようとはしない。誰もが、かかる巨大な構成体が、少なくともその生活欲求に応じて展開される生活手段の場所的時間的均衡への適応である事を知つている。

正しく同様な事実が、全地域を包括する近代国際経済の〝都市〟の観察によつて明らかになる。ところでこの問題を検討する為には、人は確かにそれらの都市に現存する扶養の困難性を新事実として見るのでなく、それを本来的な都市すなわちより小規模の都市と比較して見なければならない。〝都市的〟経済の地域に充分な食糧を不断に確保する事の困難さは増大しているのだろうかそれとも減少しているのだろうか？。充分な商品を生産し販売する事の困難さは増大しているのだろうか、減少しているのだろうか？。斯様に提起されてのみこの問題は最後的に解決される事が出来る。

そこで先ず我々には政治的紛糾の可能性が問題となる。戦争は小都市への供給地域を全く荒廃せしめ、深刻な飢饉が生ずるだろう。又暴動は全ての路を遮断して、全ての商品販売を妨げるし、包囲はある都市の糧道を断つ事になろう。だがこんな事は今日でも可能な事だろうか？。戦争が地球全土を荒れ狂い、今日大ブリテンがそれらの土地から穀物と肉類との供給を受けている全ての土地が荒廃せしめられるという様な事は果してあり得る事だろうか？。又今日でも尚若し一つの供給源が吐絶えるならば他の供給源を見つけ出すのに何か困難が存するのだろうか？。一ブッシュルだけ余計の小麦を市場にもたらす一シリングを積み重ねれば、何十万エーカーの土地が輸出用に耕作されるようになるだろう。又逆に工業製産物の著るしい価格下落は商品販売に対して巨大な新市場を切り開くであろう。又大ブリテン全体に対し、ドイツ軍隊が１８７０～７１年に巴里の大要塞を囲んだ時の様な隙のない包囲が可能であると思うものは誰もあるまい。非常に人口稠密でありそれ故に非常に富んでいるので、若し飢饉の際にもその民族は（イギリス人は）即座に穀物船を続々と出現せしめ得るだろうし、又重大な敗北によつて若干の穀物船が拿捕されたり沈められたりしたとしても、誰もその属国が封鎖され得る等と真面目に信ずる事は出来ないだろう。高い穀価は向うみずの船乗りに取つては強い誘惑である／。

現在政治的偶発事件に対しては、供給の困難さは明らかに増大するよりも減少したが、同じ事が経済的事件についてもあてはまる。中世の都市は、それに対する食物供給地域が不作に陥つた場合深刻な飢餓状態に曝されたかも知れない。その地域が狭ければ狭い程、地域全体が同時に不作になるという様な事もより多くあり得ただろう。が、そんな事は近代の〝巨大都市〟には全く考えられなくなつた。地球全体の不作等と言う事は未だ起つていない許りでなく、気象学的にも全く不可能であろう。

そしてそれは正しく商品の販売についても当てはまる。それは困難になる代りにより容易になつている／。

商品を販売する為には、人はそれを売る前に先ず市場迄はこばねばならない。

さて商品を輸送する可能性が市場の密度と共に増大する事は明らかである。そして事実ここでは二つの方向に於ける運輸の便宜化が問題となる。

第一に運河・山道・鉄道・港・蒸気汽船等々の様な有力な輸送手段は、一般に人口増加につれてのみ作られる様になる。かかる場合にのみ、必要労働力の広汎な協同が自在になるのである。そして第二に輸送は、有力な市場がそれを充分利用する場合にのみ採算が取れる様になる。全ての運輸手段には、原料生産に非ざるものとして〝収益逓増の法則〟が妥当する。言い換えればそれは〝より生産的〟となり、運賃は安くなる。市場が多くなる程、より強力な運輸手段が利用される様になる。斯くして絶えずより多くの商品が〝輸送可能〟となり、或いは販売可能性の範囲はますます拡大する事になる。何故なら運賃を差引いても普通の利潤が残される場合にのみ、外部に向つての販売はなされ得るのだから。それ故販売可能な商品のリストは増大し、更に以前に既により狭い範域で販売可能であつた商品の市場は人口よりもより著るしく拡大する。

しかも輸送の危険も比率から言えば減少する。それは一見逆説であるかの様に思われるかもしれない、というのは輸送範囲の拡大と増大する商品量と共に危険も又増大せねばならぬ様に思えるから。だがそれは真実なのである。

輸送路の自然的政治的安全性は、勿論人口密度と共に増大せねばならぬ。そして後者には何等の証明も必要ではないであろう。追剝は人口稠密な土地に於ては、人口のまばらな、その交易道路が荒野や原始林の中を通つて居る様な土地の場合よりも著るしく困難になるのは明らかである。併し乍ら〝自然的安全性〟に関しても又何等疑問の余地は存しない。強力な輸送手段を生産し得る様な人口稠密な民族は、明らかにそれを保持する力も持つであろう。疑いもなく道路や帆船に頼つた場合よりも、鉄道や蒸気汽船による場合の方が、失われる商品部分は著るしく少なくなる。人は最早サワラやゴビの沙漠

を通る貿易道路について恐怖を抱く必要はない。又我々のかつてのドイツから神聖ローマ帝国への弥撒道に於て、ラードブルッフとシュテッケンブライペンとを通る泥深い道だけでも、今日鉄道事故によるよりも輸送商品の著るしく多くの割合が失われていた。それ故、人は若しそれが残らず無傷で規定の場所に着いたにしても商品の大部分は商人に取つては〝失われたもの〟として計算されたし、運賃は思いがけぬ偶発事と故障によつて著るしく見積りを上廻つた事を忘れてはならない。

危険は個々の場合にも可成り減少したし、市場が拡大されるにともない商品輸送が巨大に膨れ上るにつれて、それは概して更に減少した。今日貨車が脱線したり輸送船が難破したりする様な事故は総計如何程であろうか？。損失は常に、世界経済に取つて、更に当該国民経済に取つて、更に個々の商人に取つてごく僅かの割合として見積られるに過ぎない。それ故ほとんど一時間毎にある文化圏の各々の場所から他の場所に向つて貨物列車が出発する様な今日、人は最早誰も、隊商を派遣する東洋の豪商の様に、又その全ての持ち物を一隻の船に委託するヴェニスの貿易商の様に彼の全財産を一挙に賭けたりはしない。それ故共同経済は僅かながら危険を持つているが、それが危険を持つていても危険が〝確かめられている〟が故に、個々の商人はその下で却つて安全性を持つことができ個々の危険が補償され得るのである。若し今日全ての商品の輸送が、損失に対する安全と言う観点から以前より比較にならぬ程容易になつたとするならば、それは市場の稠密化によつてのみ可能であつた。今日商人に取つては輸送費と保険は彼の計算に於ける一定の明白な金額となつて居り、彼は〝運賃保険料込値段〟で託送する。そしてそれが始めて多くの商品を多くの市場に輸出する事を可能にした。人口が稠密になるにつれて、輸送手段も発達し経済的に統合されるし、又それによつて持続的な政治的統合の前提条件も創られるのである。政治的統合が生ずるにいたれば関税限界は撤廃され、市場範囲の内的〝平和〟が保証され、斯くて輸送は容易になり都市の商品の販売の可能性は拡大するに至る。

それは本来の販売（即ち Vorkauf ）の場合には別様なのだろうか？。その場合には市場の稠密化と共に困難が増大するのだろうか？。結局それだけが問題となる。というのは困難が存在する事は誰も否定しはしないから。

我々はそれ故異なる段階を比べて見よう。都市の商品に対し充分な食糧が常に交換され得る確実性は増大したろうか？。それとも減少したろうか？。

地方経済の内に孤立せる都市の場合その経済領域が安全である事は確実である。重い大量商品である穀物の輸送費は、恐らく隣接領域からの商品輸入に対する隣接地域への穀物の輸出をば、それが異常な高価格の場合にのみしか生ぜしめぬだろう。併し乍ら斯様な狭い経済領域からのみ食糧を調達し得るに過ぎない孤立した都市で食糧は確実に確保出来るだろうか？。それらの都市は自らの商品を売る場合、常に又如何なる条件の下でも、普通の安楽さで（ Wagnor ）生活し得、或いは一般に生存し得るに充分なだけの儲けを得る事が出来るであろうか？。

明らかに否である。その地域が小さければ小さい程容易に起り易い不作は、都市の生産物に対する購売力をほとんど零に迄引き下げてしまう。都市生活者は恐らく、隣接地域に余剰があれば穀物と引き換えに値の高いそして特に〝輸送し易い〟商品を販売する事が出来ようが、都市居住者が自らの商品によつてそれをも支払わねばならぬ穀物の異常な輸送費は、パンの値段を彼等の手の届かぬ迄に高めてしまうだろう。その地域が広ければ広い程、市場の発達と共に輸送手段は能率的になり、都市居住者はますます安全になり、常に充分な食糧をその倉庫に貯蔵して置く事が可能となろう。都市領域が一定の大きさに達すれば、一般的な不作は生じ得なくなるので、初めて都市は現実の飢饉から全く安全となる。都市は豊作の年には以前の様に少ない商品で多量の穀物を得る事は出来なくなるが、一方不作の年にも少ない穀物に対し沢山の商品を引渡す必要もなくなる。すなわち穀物の価格はその生産高によるふれが絶えず減少するのである。

都市居住者に対し絶えずより安定化する生産価格でより確実に食糧の供給

が行われるというこの傾向が、更に国民経済を充分に形成せしめる迄貫徹される事について異議を申し立てるものは誰もあるまい。それでは国際経済の形成と共にこれとは逆の傾向が貫徹されるという事は是認できるだろうか?。世界の農業経済の領域は相変らずますます拡大かつ多様化し、今日既に全生産は風や天候よりも寧ろ先年の取引価格によつて定められる様になつては居ないだろうか?。そして絶えず強力になる輸送手段が原産地から我々の製粉所迄に要する運賃を些細なものにしたので、我々は我々に自由になる穀物（Früchte）をほとんど毎月収獲しては居ないだろうか?。我々は今日1トンの穀物を、アメリカのロッキー山脈西部からベルリンの倉庫迄、100年前にポンメルンから運んだより少ない費用で運んで来はしないだろうか?。

この場合我々の反対者にはなお一つの異論が残されている。すなわち以上のような事は世界経済全体に対しては妥当するかも知れないが、個々の土地、例えば全く輸出産業にのみ依存する土地に就いても正しいであろうか?。何か特殊な商品が何等かの理由で、例えば増大した商品量を販売する為の新市場を工業が征服し得ぬとか、古い市場を外国の競争者に奪われてしまつたとか言う理由で、販売困難に陥る事はないであろうか?。

そしてこれが〝予言的マルサス主義〟の第二の変種の最後の逃れ路である。明らかにかかる〝ダモクレスの剣〟（ワグナー）の下に見出さるべき唯一の土地は大ブリデンである。我々はそれ故斯様な危険に脅かされている国が、最悪の諸条件の下に置かれた場合にどうなるかを検討して見よう。

かかる反論の不合理を証明する事はいともたやすい事である。と言うのは彼等は極端きわまる形式的可能性、だが決して現実となる事はあり得ない可能性、を与えられたものとして仮定しているのだから。

我々はイギリスが突然しかも一夜の内に、外国に向けての商品の全販路を失い、外国に対する貸与の全体を失い、外国勘定による貨物輸送の全体を失つて了つたと想定しよう。これは確かにV. Fircksによつて危惧された若干の世界列強による関税封鎖よりも明らかにはるかに痛烈な打撃であろう。それはまた世界の全ての国々がイギリスの

生産物に対し禁止関税をしいたも同じ状態であり、外国に投資されたイギリス資本が没収されたも同じ状態である。斯くしてイギリスは自らの商品販路を専ら国内市場に限らねばならず、又自らの食糧供給を自国の農業生産に求めねばならなくなる。そこで更に我々は、かかる不幸が最も間の悪い時期即ち食糧の保存が最も少ない収穫前に生じたと考える事にしよう。この場合一体何が生ずるであろうか？。

それを評量する為には、連合王国が今日尚どれだけの食糧を生産し、それを頭割りに割りふればどれだけになるかを明らかにして置かねばならない。

大ブリテンは１９世紀の終りに、なお優にその人口１人当りで、イタリーと同じだけの穀物及び肉類等の食糧を生産していた。かかる前代未聞の破局に際し、まず差当つての窮乏に対しては、尚通常の年には牛の総数の２０％と羊の総数の４０％が屠られるに過ぎない様な飼養家畜と、更にその大部分は過剰となるであろうし又最早それを多くの所有者が到底調達し得ぬ価格の飼料で飼育する必要もないのでそれを殺しても差支えない様な馬と、の夥しい貯蔵が存在するであろう。

勿論イギリスの醸造所や火酒製造所は差当りほとんど全く操業停止の状態となろう。何故なら穀物の価格は驚く程の高さにはね上るだろうし、購売力はほとんど全部が食糧に対する需要に吸収されてしまう為にアルコール飲料に対する需要はほとんど零に迄近附くであろうから。ところで人は道楽にビールや火酒を醸造しているのではなく生産価格と販売価格との差額を儲けたいが為に醸造しているのだから、アルコール飲料の生産は最小限に迄減退する。

人はそれ故、イギリス民族が決してかかる未曾有の打撃の後に飢餓に瀕する様な事はないという事を理解するに違いない。露命をつなぐ為には彼等の平常の生産高で充分であり、しかも荒野にはなお巨大な貯蔵が存在しているだろう。しかし、その貯えをたちまち増加させる為にはなお他の手段が存在する。

まず漁業である。我々の仮定に従えば、イギリスは積荷なしの船と仕事のない船員が存在する事になる。それ故傭船契約と水夫の賃銀は以前よりも安くなる。しかも他面魚は以前よりも値段が高くなろう。そしてそれ故漁業は、今迄利用されて来た漁場よりもはるかに漁獲の少ない漁場においてさえも割のよいものとなる。斯様に若しそれが必要であり或いは若しそれが割のよい仕事であるならば無尽蔵の食糧源が引き出される事になるのである。

ところで漁業には道具が欠けて居はしないか？。またこれまで輸出の為に働いていた労働者が全部仕事をしないでいるのではないのではなかろうか？。またこれらの労働をこれまで使つて来た資本も遊んではいないのではなかろうか？。それ故労働者も資本家も注文の僅かでも確保する為に相互に自らを安売りしたり、又収益の蓄積が作られるずつと前に、網やその他の必要品を最低の価格でしかも必要なだけの数量をはたちまちの内に所有するにいたると言う様な事はないのではなかろうか？。

そこで第二に園芸耕作が問題となる。もし価格が充分な収益を保証しさえすれば、人は1年中果物や馬鈴薯の大規模な早期収獲を行う事が出来る様になる。さてこの場合には価格は充分な収益を保証するだろうし、使い途のない資本は温室の為の瓦やガラス板や枠や暖房装置を大規模に生産する様になろうし、労働者も自らの家族を養い得る賃銀に対して自らの労働を提供する様になるだろう。斯様にして何千ヘクタールという土地は、今日既にゲルンゼイのほとんど全てが温室で蔽われている様に、非常な速さで温室によつて蔽われるに至るであろう。そして5月には最初の大量収獲物が市場に調達されるであろう。

以上の全てやまた多くの他のもので第1年目をイギリスの人口がどうにか持ち応えるには充分であらう。若し全ての蓄えが平等に分配されたにしても、直接の食糧不足により扶養余力を超えて破滅してしまう様な事は決してない。そしてかかる破局は最悪の場合、ある包囲された都市の様な場合にのみ考え得るにすぎない。

ところで現在及び間近かな将来に対する心配の外に、なお遠い将来に対する心配が起るに違いない。官庁による命令等はこの場合全く不必要である。市場が商品の価格形成を通して与える秩序というものはたちまちの内に完成される。穀物価格は驚ろく程高くまた長年高値を続けるだろうし、輸出用の工業生産物の価格は全て零にまで低落し決して上昇する事はないから、資本や労働は必然的に農業に投下される様になる。多くの〝浮浪者と化した〟資本は何等かの仕方で土地所有者に結びつくだろうし、農業生産は巨額の金をもたらす。斯くて再び農業は割がよくなつたのであり、しかも以前よりもはなはだしく収益が増したのである。そしてそれ故農業危機の作用により耕地から荒地及び森へと変化を余儀なくされ、現在ふたたびスキを入れられた全ての土地のみならず、之迄は常に耕作の限界すなわち収益性の限界とされていた多くの土地も耕作されるに至る。斯様に驚く程拡げられた地域はこれ迄に聞いた事のない程の用具と労働の投下によつて経営されるだろう。何故なら工業がこれ迄の農業の純収益に対しては全く釣合の取れない様な価格で機械・道具・補助材料を供給するようになるから。勿論これ等全ての物に対する絶対的需要が高く釣り上ると同様に、相互に安値をつけて争う工業による供給も又高く釣り上るであろう。大規模な排水、灌漑設備が導入され、又夏畑や牧場にする事が出来る様に山の雪溶水をせきとめて、沼が乾かされもする。だがそれにもかかわらずたとえ開墾が余り行われないとしても単位当りの平均収獲はおそらく今日よりも上昇するであろう。そして既に次の収獲期にはその成員の全てを充分満足させるに全く充分な夥しく大量の穀物収獲が国民の食卓に供せられるという結果が生ずる事であろう。

この場合生ずる事と言えば破滅的に変化した生存条件に対する国民経済社会の機構の急速な適応以外の何物でもないであろう。世界経済圏の〝都市〟としての地位から突然押しやられて、その国はあらゆる経済社会に不可欠の均衡を農業と工業との間にふたたび取り戻さねばならぬ。だがその様な均衡は価格変動によつて自動的に作り出されるものである。そして新しい均衡状

態の成立の後には人口収容余力もふたたび充分となるであろう。何故なら分業は人口の稠密さによつて、急速な適応をなすに充分なほど強力であるから。

我々は逆に同じ様な破滅が人口稀薄で分業の進んで居ない国民経済社会、例えばロシアを襲つたと仮定しよう。その場合国民の生活は何十年もの間甚だしく切り下げられるだろう、何故ならあまりにも人口稀薄なこの国は、これ迄に使用して来ただけの機械や日用品でさえもすぐさま充分に生産する様な状態にはなつていないから。人々はしばらくの間は今迄より豊かな食事を摂る事が出来ようが、ただそれだけの事である。多くのこれまで使いなれて来た満足の手段は欠乏し始めて苦しくなり、その上やがては食糧生産の為の道具や補助材料（化学肥料）を欠く為に食糧さえも不足に悩む事となろう。

上述した国民経済の適応は、それが貨銀体系の下で考えられる場合にも余り変りはしない。農業や農業の為に生産する工業諸部門は、輸出工業において過剰となつた労働者を吸収するであろう。この場合新しい均衡が実現されない内は、（穀物の）生産価格の高騰と利潤の多い農業への労働力の流出は終る事がないであろう。

勿論かかる突然の破滅によつてイギリス国民の生活水準、特にイギリス労働者階級の生活水準は可成り低下するであろう。何故なら第一に余りに多くの製品が無価値となり、第二にずつと少ない労働力で充分な、狭まつた市場に対して生産を行う工業は、人口1人当り非常に低い生産性を持つにすぎず、第三にその独占状態によつて著るしく高められた異常に高い地代は、全生産物の大部分を奪い去つてしまうだろうから。だがかかる生活水準の低下は、工業生産物や、余り豊かでない国民に取つてはその大衆的消費が贅沢と考えられる様な食糧、すなわち肉・砂糖・ビール・アルコール等の消費減退として現われるであろう。しかしながら、我々が前提した様な未曾有の破局の後に、人口の〝過剰〟部分の生存を脅かす様な絶対的食糧不足が生ずると考えるのは全く馬鹿げた事である。

我々は以上で、形式的にも極端で実際には考えられぬ様な突然の完全な

販路閉塞の場合にも、マルサス的な意味での〝積極的障害〟を伴う〝人口過剰〟が生じ得ない事を確かめたので、次に輸出産業の盛んな国で実際に生じ得る事柄を明かにする事としよう。

若し我々がこゝで戦争とか革命とか言う政治的性質の一時的障害をさて置くならば、以前の買手自身が生産者になつた場合とか、外国の市場で新たに輸出競争が起つた場合に生ずる様な、販売に対する持続的障害が問題となる。それ故我々は斯様な危険に就いて検討して見よう。

商品市場における競争の激化は、明らかに個々の商品の価格と利潤の低下を意味する。だがそれは労働者個々人1人当りの賃銀の低下や、企業家個々人1人当りの利潤の低下を意味しない。むしろ逆に当該産業の生産性が著るしく高まる結果労働賃銀と利潤総額は著るしく増大する。何故なら労働者ならびに企業家1人当りの年間商品生産高は、価格の低下を償つて余りある程著るしく増大するから。たとえば単位価格が3マルクから2マルクに低下したが、労働者は用具の改良によつて1年に300個の代りに600個を生産できる様になつた場合には、彼の出来高賃銀は1個当り1/3だけ減るが賃銀総額はむしろ1/3だけ増すであらう。

然らば如何なる場合に生産性は高まるだろうか。まさしく市場が拡大された場合である。市場が拡大されて高度の分業も利潤を生む様になるのである。ところで競争の激化に伴う商品価格の低下によつて市場が拡大すると考えてよいであろうか。

それは単なる仮定ではなく価格低下に伴う必然的結果である／。

商品の価格低下に伴う市場の拡大は二つの仕方で生ずる。まず第一に大量生産品の価格低下は、常により多くの社会層を消費者に引き入れる。それ故消費はいわば集約化される。すなわち同じ土地の上で同じ人口数により消費される商品量は価格の低下よりも著るしく増大する。

第二に消費はまた拡大される。何故なら工業製品が安くなればなる程相対的な穀物価格、すなわち商品によつて表現される食糧の価格は高くなり、農業人口、更に〝豊かな農民〟は商品価格の競争による下落を伴う事なしに増加する。そして同じ理由により世界経済圏の周辺の新しい土地の開墾が行わ

れる様になる。

それ故収獲可能な土地全体が耕作され尽す迄は、均衡の攪乱は決して持続的には生じ得ない。若し世界経済圏における工業の比重が大きすぎる様な事があれば、穀物価格は上昇し、国内でも国外でも新しい購買力ある農民が顧客として現われるであろう。従つて経済の均衡状態からのふれは漸次減少するし、これまでに達せられた最高の生産段階において生産され世界市場価格で販売される様な商品が、長い間買手を見出し得ないという様な事はあり得ない。

従つて実際に起り得るものは、過剰生産或いは過少消費による危機であるが。斯様な危機は絶対的人口過剰の結果ではなく、一さもなければかかる危機は必要な〝人口の清算〟（マツクスウエーバ）が生じない内に消滅してしまつたりは出来ないであろう— 逆に一時的な相対的人口過剰の原因なのである。そしてかかる危機の原因はそれ故国民経済の適応の不充分さの内にのみ求められねばならぬ。

第二にかかる危機は輸出工業にのみともなうものでは無い。すなわちかかる危機は世界市場を目指す工業よりもむしろ、国内市場に制限されているかあるいは人為的に競争から自由な工業において、より深刻に大衆の生活水準に対する破滅的な結果をともなつて現われるのである。更に第三に、人口の増加、それによつて条件づけられる世界経済の発展、更にそれに関連する市場に対する見通しの改善（例えば電信）、価格の低下に伴つて必ず生ずる低位階層に対する販路の巨大な拡張、更に世界の穀物収獲における最大限と最小限のふれの減少に伴い、すなわちそれら全ての条件によつて頻繁で深刻な危機の可能性はたえず減少するようになるという事についてはほとんど全ての科学が今日一致して認める事である。そして所謂戦争や革命の様な危機と言うものは持続的なものではない。それ故この場合〝人口過剰〟の持続的な結果のみならず一時的な原因についても問題にはなり得ないのである。

そして更に生じ得るであろう事は、自国の生産費が他国の競争相手のそれよりも高いが故の個々の国民産業の困窮である。しかしその原因は、市場状

恵や原料供給の自然的不利他国の関税政策（例えばドイツの砂糖消費税）、旧陋に固執する悪しき保守主義（人がしばしばイギリスの工業家を非難する様に）、あるいはおそらく高賃銀（？）等の内に求められる。

だがしばしば同様な原因から、一国の一産業が他国のそれによつてその市場を奪われる場合がある。だがそれは〝人口過剰〟とは少しも関係はない。それは大産業に対する手工業の屈服と言う観点からのみ把え得るものである。それは競争の現象とは言えても人口現象とは言い得ない。人口増加との関連は、貧弱せる国で競争国よりも生活手段の価格が高いために平均賃銀が競争国より高くなり、またそれによつてすべての産業部門が苦しまされると言う様な場合に僅かに推測され得るに過ぎない。だがそれに就いては上に詳しく説明した様に、大ブリテンの場合には何等問題ではないし近い将来においても何等問題とはならないであろう。

だが個々の産業や、あるいはある国の全産業が生活手段の価格や賃銀の騰貴によつてではなく競争力の不足によつて苦境に立つたり困難に直面する事があるにしても、それは〝人口過剰〟の結果ではなくおそらく〝人口過剰〟の原因であろう。その場合には当該産業が無為の罪によつて失われた競争能力を再び取り戻すか、あるいはイギリスの絹織物業や製糖業の様に当該産業は放棄され、それに使用されていた資本や労働力は生産の他部門に移動せしめられねばならぬ。

この様な場合はたとえ国民性の深刻な堕落が生じない場合にも起り得るし、これまで絶えず起つたのである。それ故市場の損失と言うものは、競争者がより安く売る事が出来る場合にのみ生ずるものである。斯くして競争は購売力の一部を解放し、この解放された購売力は世界市場において同一商品に対するより以上の需要や他の商品に対する需要として現われる。斯くして従来の産業の拡大の為の、又新規産業の創出のための余地、即ちその資本と分業とが、換言すれば、適応能力が大きくなればなる程ますます確実にそれを満たす事が出来る様になる余地、が生ずるのである。そしてこれこそ人口の稠

密化の〝機能〟なのである。

以上において検討して来た全ての見解は全く非有機的であり非歴史的である。すなわち彼等は工業の生産力を自由に成長し得るものと考え、同時に販売市場を固定したものと考えているが、これは全く非有機的である。何故なら工業の発展とその農村の販売市場との間には、弾力的でしかも分離し難い結合が存在しているから。工業人口と言うものは勿論農業における余剰が増大する度合に応じてのみ増加し得るし、工業生産と言うものは農村の購売力が増大する度合に応じて増加し得るものである。この点でマルサス主義者は正しい。がそれは盾の一面にすぎない。逆に農業もまた工業人口の増加する度合に応じて発展せねばならず、農業生産も農産物の価格の騰貴する度合に応じて増加させられねばならない。そしてこれこそこれまでほとんど普通には見逃されて来た盾の他の一面なのである。

以上に検討して来た見解はまた非歴史的である。何故なら第一に、この場合原始経済的過程が高度化された段階において更に実現されているにすぎないと言う事を知らず、又第二に文明人の経済の最初の歴史もかかる観点以外の下では全く理解されないものであるから。大西洋の彼岸の農業とヨーロッパの工業とは正しく上述した様な仕方で相互に発展しはしないであろうか？。１８６０年代と１８７０年代の始めに生産物の価格を未曾有の高値に迄吊り上げた工業の側における著るしい均衡撹乱は、たちまち穀物の価格が１０年間も下落するという農業の側における反作用を惹き起し、それ故工業が、増大する需要により農産物価格がふたたび上昇するに至る迄、新しく巨大な発展を遂げるとは言えないであろうか？。我々は今日、アルゼンチンや小アジアやおそらく後にはシベリア・スーダン等で、新しい食糧生産地域や工業市場を著るしく拡大せしめる様な食糧の価格に近づいては居ないだろうか？。そしてヨーロッパの工業生産物の価格に対する圧迫そのもの、その販売困難そのものが、かかる将来の諸市場を中央市場に結びつける力であるのではなかろうか？。ヨーロッパの資本が世界を鉄道と蒸気船の交通網で更に密に張

り廻らそうとして何で出来ない事があろうか。そして更にその商品供給によつて未開ならびに半開の諸民族の自然経済ならびにマニュフアクチャア経済に浸透し、新しい需要によつてこれ等の諸民族に対し、彼等自身の農業生産の拡張と集約化に対して又彼等の購売力に対して刺戟を与えようとして出来ない事があろうか？。これらの植民政策が人道主義者の行うそれと異なるところがあるだろうか？。ドイツはそのアフリカ領有に際して、人口を稠密化しその購売力を高めるための内的平和と安全とを目的として抱いていたのではなかろうか？。

しかしながら就中全ての統計的観察は工業国の最良の顧客が他の工業国である事を示している。商品の競争による価格低下が購売力を解放し、その解放された購売力が市場に対する需要としてふたたび現われ新しい産業を産み出すに至ると言う我々の解釈以外の解釈が可能であろうか？。他の解釈によつては、非常に強力で全ての国々に輸出を行つている工業を有する諸国、たとえばドイツとかイギリスは、たえず増加する度合で外国の工業生産物を吸収する事ができると言う事を理解出来ない。

ともかくこれまで世界市場領域の拡大と集約化の過程、ならびにその購売力の強化の過程は、たえず工業の生産性よりも速かに発展したので、個々の商品の価格は下つたが、しかしそれにもかかわらず賃銀と利潤は上昇した。と言うのはすべての労働者個々人が以前の段階よりはるかに多くの商品個数を生産し、全ての資本家がそれを売る事が出来たから。

斯様な仕方でこの様な過程はなお百年も続いたし、その間に資本蓄積と市場の購売力とは生産力の二乗よりも更に速かに成長したが、輸送や販売の困難や危機は生産力の二乗に比例して減少した。

今一度今迄のべた事をより一般的な形で要約するならば、工業がより大きな競争力を持つ迄に発展したところでは、それによつて食糧に対する国の需要が増加し、穀物価格も騰貴する。一方工業の市場に於ける競争が激化する様なところでは商品価格は下落する。それ故工業はその成長自体によつて二

つの面から食糧生産の収益性を高め、輸送費を低下させ、それ故農業の為に、それがやがて新しい市場となる様な新しい地域を切り開く事もする。

だがその為に工業が何等かの窮境に陥る様な事は絶対にない。何故なら個々の商品の穀物換算価格が一般に下落する場合にも、生産力は尚それ以上速やかに増大し、その結果工業従事者はよりよく又より豊かな食糧供給に対し、年間総生産高のより少ない部分を与えればよい事になる。それ故双方共に利益を受ける事になる。すなわち農業はその所有する穀物に対しより多くの交換物を得、また市場が近づけば近づく程同じ土地からより多くの収益を挙げ得る様になるし、工業従事者は彼の総生産の内からより多くを、より高級な満足手段との交易の為に残して置く事が出来る様になるから。

斯様な絶えず拡げられた範囲で完成される巨大な統合化の過程の何処から、地球全体が実際に〝住み尽される〟前に、何か持続的な困難が生ずるかと言う事は見極め得ない事である。そしてこれによつて〝予言的マルサス主義の第二の変種〟は全く反駁された事になる。それは、自らの市場独占に危惧を抱き、〝大きな食物の小さな部分〟が小さな食物の大きな部分よりもより多い場合もあり得ると言う事を理解しようとしないある有力な工業集団の私的関心の表現以外の何物でもないのである。現実の共同利害も全世界におよぶ経済的自由貿易を必要としている。—そしてその上それのみが未来の戦争を防ぎ得る唯一の政治的手段なのである。

C　総　　括

要約するならば我々は、今日人口理論と呼ばれているものは、それらが全く異なる考慮の上に全く異なる事実に就いて語り、全く異なる結論に導びくものであるが故に、三つの根本的に異なる理論に分けられねばならぬ事を示そうと努めて来たのである。

我々はこれ等の理論を理論的に別個のものとして考えて見ようとした。それは次の通りである。

1　本来のマルサス理論

彼等はいわゆる自然法則が、過去現在未来を通じての人間経済の各段階に当てはまるものと見做して居り、〝土地に於ける生産の法則〟の適用範囲に就いて重大な偽瞞の上に立脚していた。かかるものとしてこの理論は何人にも科学としては認められぬものとなつたし、彼の偉大なる洞察は二つの追随者の誤解によつて酬いられているに過ぎない。

2　数字で偽瞞する予言的マルサス主義

それは人口数と食糧との間の自然法則的かつ必然的な不均衡に就いて述べる点ではマルサスと一致しているが。かかる不均衡は各経済社会の常規(Regel)ではなく、何時か未来の或る時期に現われると考える点で前者と異なる。それはかかる未来を可能な食糧生産と人口数との関係のグロテスクな誤認によつて間近に存在するものと考えたし、又フランクリンによつて用いられた傾向（Jendency）と言う言葉の意味の誤解に基づいて厳密な算術的表現を漠然たる将来の脅威と解する事によつて自らをマルサス的と考えた。だがかかる臆説は反駁し得る根拠がない為に反駁する事は出来ない。それは正しいとも正しくないとも言い切れない、何故ならそれは無限に遠い将来に関する問題なので、それに就いて論議する必然性は全く存在しないのだから。

3　〝相対的過剰人口〟を唱える予言的マルサス主義

この説も又傾向（Jendency）と言う言葉の意味の誤解の上に、だが自然法則という根拠からではなく前提された社会的紛糾という根拠から、将来への危惧を表明している。かかる見解は、それが（その様な新事実なるものが）実際は昔からの発展傾向のより広い領域における表示以外の何物でもなくかつその様な危険は明らかに包括される領域が拡がる程少なくなつているのであるが、輸出工業諸国間の諸関係の内に大いなる危険を孕んだ経済的な新事実を見ようとするが故に非歴史的である。又かかる見解は更に生産と市場との最も重要な諸関係を誤解したが故に非有機的である。彼等はマルサスの用いた過剰人口なる言葉の意味を誤解する事によりマルサス主義的であると自

認している。彼等は〝相対的〟人口過剰なる概念をマルサスの〝絶対的〟人口過剰と同一視している。

予盲的マルサス主義の二つの変種は、それらが解決する事を要請されている問題すなわち資本主義の初期以来の分配の問題に触れる事さえも不可能である。

かかる三つの理論が、人が今日〝人口理論〟と名附けているところのものの内に介在し浸透し、謬論のほとんど解き難い迷路を形成している。

D　人口法則を廻る論議に就いて

１９００年に、私がその内容を今迄簡単に抜萃して来た〝マルサスの人口法則〟が出版されたが、それに引続き忽ち攻撃された見解を擁護する諸労作が多数現われた。Julius Wolf[1]やHeinrich Dietzel[2]は独立の研究を１冊の著書の形で著し、他の人々も折りにふれてこの問題に触れている。たとえば Philippovich や Adolf Wagner はその教科書において、Ludwig Pohle[3]は別個の著書においてこの問題をとりあげている。ところで〝人口法則〟の出版後私は新しい私にとつてもつと重要な研究に従事する様になつ

1) Ein neuer Gegner des Malthus. Zeitschr. f. Soz. Wiss. IV. 257ページ
2) Der Streit um Malthus' Lehre. In der Festschrift für Adolf Wagner, O. J.

たので、私はこの問題からしばらくの間手を抜き、ただ時折この問題についての見解を表明するに止めた。すなわち一度は、ペルンシュタインとボーレが私に対して提起したかなり重要に思える唯一の非難に対する私の『マルサス社会理論の根本原則』[4]における反駁においてであり、今一度は、〝新人口法則〟という標題の下にBartheの〝Archiv für Wissenschaftliche Philosophie und Soziologie〟と〝Revue economique internationale〟に同時に掲載されたツォルフの論文に対する反駁に於

3) Deutschland am Scheidewege. Leipzig 1902.
4) Das Grundgesetz der Marxschen Gesellschaftslehre. Darstellung und Kritik, Berlin 1903.

ででもつた。ところでこの最後の労作は全く人に知られぬ儘であつた様に思われる。若し彼がそれを読んで居たならディーツェルの批判も全く別の形を取らねばならなかつただろう。

その後しばらくして Diehl にすすめられ、その綿密で重要な内容を持つ研究[5]に於てふたたびこの問題を取扱つている Siegfried Budge もまた、この論文には気付かなかつた。私は彼に『マルサス問題の為に』[6]と言う論文で反論し、それに対し彼も又同じ標題[7]で駁論した。だが私は当時それをふたた

5) Das Malthusche Bevölkerungsgesetz und die theoretische Nationalökonomie der letzten Jahrzehnte Karlsruhe 1912.
6) Archiv f. Sozi-Wiss. XXXV, S. 528ff.
7) Ebendort XXXVII, S. 930ff.

び反批判する気持にはなれなかつた、と言うのはこの論文は明らかに彼の著書の内に述べられ私によつて反駁された主張の繰り返し以外の何物でもなかつたから。けれども今は丁度よい機会なので私はふたたび詳細に検討して見る事にしよう。

先ず第一に Budge に就いて見るならば、彼が私に対して行つている根本的非難は全て一つの源に根ざしている。彼はマルサスによつて引用されたフランクリンの定則（Formel）、すなわち全ての生命はその扶養余力を超えて生長せんとする傾向を持つと言う定則は、私がその内に見出した様な正確な幾何学的意味を持たぬと主張する。彼は〝傾向〟と言う言葉の下に何か将来予定されている様な、何か未来的な、未来に起りそうなあるものを考えている。彼によれば、傾向は原因で扶養余力に対する圧迫は結果を意味する。そして彼は私が斯様な区別をしなかつたのではないかと疑問を抱いている。正しくその通り、かかる区別をする必要はないと言うのが私の意見である。

私の意見によれば、フランクリンの使つた〝傾向〟と言う言葉は将来を指示するものではなく全ての自然法則の様に常時あらゆる場所で作用する様なあるものを意味している。正しく〝傾向〟という言葉は強いひもの先につけられて輪を画いて廻つている石が空中にとび去ろうとしている様な状態を意味し、それ故ひもは最大限に引き伸ばされるのである。

従つて下層階級の賃銀はこの法則が作用する場合（扶養余力が人口よりも速かに成長した例外的な幸福の時代を除き）、生理的最少限に達するか、あるいは少くとも最少限へ低下せんとする傾向をたえず示して居らねばならぬ事になる。マルサスは、私自身が確かめた様に、かかる結果を指摘しはしなかつた。何故なら彼は彼自身の前提に含まれている正確な量的規定を行わなかつたし、又かかる結果に尻込みをしたから。彼は実際には、Budge によつて説かれている様な、労働者にも又社会的必需品の最小限を保証する様な〝潜在的〟（ Potentiellen ）生活空間の様なものを説いたのである。若し Budge やその他のマルサス説擁護者達が、マルサスは全くの最小限以上の賃銀が可能であると考えていた事を充分に証明したにしても、それは私の論争点には何等関りないのである。だが第一に、かかる結果は前提が正しく理解されている場合には導き出され得ぬものである事、第二に、かかる結果はマルサス的な論理の壊からではなく正しく理解されたフランクリンの根本前提からのみ導出され得るものである事は明らかである。何故なら積極的抑制は、社会全体に対して、生理的最小限が到達しない内は作用し得ないのだから。個々人に就いては、彼が社会的最小限に迄その欲求を正し下げられるより前に飢える事もあろうが、一つの階級全体が、彼等に全ての文化的欲求が拒否され彼等の為の食糧・衣服・住居が最小限に迄達しない前に滅び去つてしまう事はあり得ない。それについては如何なる論議も必要ではあるまい。

マルサスのかかる誤解から、私への反対者のある者たち、特に Budge が、私が行つた近代マルサス主義の三つの前に説明した様に全く異なる理論への分類を承認しまいとする態度が生ずるのである。彼等はとりわけワグナ

一・リューメリンやその他の『予言的マルサス主義の第二の変種』の解釈が本来の〝人口法則〟とは全く異なるものであると異議を唱え、その意見をマルサスからの数多くの引用によつて証拠づける。だがその様な手段は全く無駄である。人はマルサスからの引用によつて、彼等の論題に結びつけられているのとは全く逆の事を証拠づける事もできるだろうから。全ての演繹的能力を全く欠き健全な論理を欠いている様な人間だけが、斯くも矛盾だらけの著書を書き得たのである。マルサスの著作は一行一行が矛盾して居り、それ故彼の反対者の見解に味方する様な文章も又明らかに見出される事になる。かかる事情の下では、彼の命題から現実に結果されるものを自ら確かめると言う私の取つた様なやり方だけが許され得る。何故ならここで我々に問題なのはマルサス個人ではなく、彼の所謂法則であるし、この事は全く同時に彼の労作の原文にもあてはまる事だから。

マルサス的論証に就いてはこれだけにして、吾々は、扶養余力が逓減する傾向を持つて居るマルサスの主張と、収獲逓減の法則は技術や装備や道具の改良によつて覆えされるので、扶養余力は逆に増大するであろうと言う私の説とを検討して見よう。

私の批判者達も普通かかる私の反対命題をヨーロッパの文明諸国に対しては当てはまる事を承認するであらう。『ヨーロッパ文明国における土地収獲がその人口よりも若干増加した事は明らかである』（ Budgo ）。かかる確認と共に一さもなくば(それは無意味であろう—ヨーロッパの文明国が1人当りの食物の割合を増大し、かつ必要な最低限以上に逓増大し得たのは全く異常な努力を通してのみ可能であつたことがほのめかされる。事実 Budgo は挿入文の内で、若し農業が事実生産し得たよりも以上のものを生産し得なかつたにしても、その事から消費者が若し同一の物（食糧）を同じ価格か或いは低い価格で入手出来るならば、更に多くの食糧や或いは更に質の良い食糧を消費し得ないだろうと言う結論が引き出される事はないであろう。しかしながらオツペン ハイマー自身も諸国の大衆の栄養が適度の栄養と栄養過剰との

限界点に達していると主張しようとはしないであろう」と注意を与えている。若しこれが私の解釈に対する攻撃を意味するものであれば、それは事実まことに注目すべき問題である。

問題はすこぶる簡単である。すなわち、労働者の賃銀が低下するのは農業が自然的原因により充分な食糧を生産し得ないからであろうか？。それとも農業が充分な食糧を生産しないのは賃銀が社会的原因によつて低すぎるが故、又それ故農業はより以上のより良き生産に対して購買力の伴う需要を持ち得ないが故であろうか？。と言う事である。マルサスは前説をとり私は後説を取る。すなわちマルサスはここで生産性を問題とし私は利潤性を問題としているのである。Dietyel や Budgo 自身も、彼等の攻撃にもかかわらず、かかる二つの問題を充分慎重に区別しなかつた事をここで強調せねばならぬ。私は前に引用した言葉の内に、如何に努力してもこれ以外の意義を見出す事は出来なかつた。

農業が1人当りの食物量をいささかも増大させなかつたと言う事実は、農業生産が現存の技術の限界により現在以上の人口を扶養する事の不可能を少しも証明しはしない。逆に、事実の分析は、明らかにヨーロッパやアメリカの農業では現在既に知られて居り証明ずみの方法による集約、耕作によつて非常に大きな粗収益をあげる事が可能となつており、これには如何なる限界も存せず、生産の増加が実現されないのは農産物の価格が農業を収益の多い産業たらしめる程充分に高くはないからである、と言う事を示しているし、この点に就いては全ての専門家の意見が一致している。農業はおそらくより以上の生産を挙げ得るのであるが、当然の経済的理由から、より以上に生産を高めないだけなのである。若し農産物が短時間に、購売力を伴う需要に対応する以上に市場に供給されるならば、キングの法則により破滅的な物価暴落が生ずる事だろう。若しヨーロッパ文明諸国1人当りの食糧が少しでも増大したのであるならば、それは大衆の賃銀が若干上昇し、よりよく満服し食糧の一部をよりぜいたくな食糧、例えば肉やビールの形で買う事が出来る様

になつたが故にのみ起り得たのである。若し賃銀がより以上に上昇するならば、1人当りの食糧もより以上に増大し得るに違いない。

だが1人当りの（食糧の）割前が増大したのは既に承認ずみの事であるから、私もまた全ての非難に対しては、正しく理解された人口法則の断念をば繰り返して説けばよいのである。それ故このヨーロッパ文明の全期間においては人口は生活空間の内に無理に詰め込まれてはいなかつたのであり、それ故又同じ期間に賃銀はたえず停滞していたと言う全くしばしば普通に承認されている事実に対するすべての説明も成功し得ないことになる。しかしながら実際は、人は賃銀の停滞を農業の生産性の不足から説明してはならず、農業の生産性の不足こそ賃銀の停滞から説明されるであろう。

Budge やDietzel は食物生産が絶えず増大する社会的困難に直面していると言う事実、即ち食物の貨幣価格は同じ期間に著るしく増大する傾向を持つていたと言う事実から、彼等の主張に対する第二の論拠を得ようとしている。私はそれを〝根本的誤り〟と名付け、既にその内でたとえ物の社会的労働(904頁)によつてあらわされる実質的価格が下落しても、貨幣によつて表わされる名目価格は上昇し得る事を明瞭に説明しているスミスからの引用文を示した。若し穀物の貨幣価格が上昇したとすれば、それはたとえば貨幣価値の下落によるものであろう。Budge も原則的にはそれを承認したのであるが事実によつて、かかる理由はリカルド時代のイギリスに就いては決定的なものではあり得ないと言う事を論証しようとする。その際彼は彼によつて説明さるべき穀物の騰貴が、第一にナポレオン戦争と大陸封鎖、次に経済史上に於て最も破廉恥極まる穀物関税政策と同時に生じたものである事を見落している。[1] 我々は確かに、この期間に穀物価格が騰貴した事を理解する為に、貨幣価値に就いての詳しい研究を必要としない。ドイツでもまた価格騰貴は生じていた。だがその原因はすさまじい速さで実現された農村の産業化が、穀培の集約化と拡張とがどうにか需要を満すようになる迄、またとりわけアメリカ農

1) Ballod, Grundriss der Statistik Berlin 1913. 107ページ

業との競争が起るようになるまで、食糧の価格を全ての他の生産物にくらべまた貨幣にくらべてもなお著るしく騰貴せしめざるを得なかつた点にある。事実1850年以来は Budge が認めている様にカリフォルニヤの金鉱発見による金の下落もまた原因となるに至つた。だがかかる数字は彼が証明すべきものを何等証明しない。それは唯、人が事実を問題にする場合には純粋理論だけでは不充分であり、動的攪乱要素をも又計算に入れねばならぬ事を示すに過ぎない。

我々は次に Bernstein と Pohle が私に対して行つた唯一の重大な批判について検討して見る事にしよう。既に以前からマルサスの反対者はマスサスに対し、マルサスの前提の下では都市人口の相対比率は増加せずに減少せねばならぬと異議を唱えていた。と言うのは若し将来農業が平均してより狭い土地でより少ない食糧を生産する様になるならば、彼は勿論自給者として自分と自らの家族を養うであろうし、都市居住者は二つの面からだけでも相対的に少ない余剰を買うことができるにすぎないから。私もまたこの点を批判したのであるが、我々の批判者諸氏はこれは "統計的錯誤" であろうと答える。都市化という現象はただ農業的要素を把えたのみならず、以前から村に生活していた工業的要素をも把えたのであり、事実既に全く分化していた手工業者や商人許りでなく、以前の農民に当る部分そのものをも巻き込んだのである。何故なら第二、第三の大規模な分業の時期以前に農民は副業的に多くの工業的労働を行つていたから。

かかる工業的労働は彼から分離するに至つたし、それは現在都市に居住する身体を持つた代理者という形で示されるであろう。そしてそれ以来農民は文字通りの農民として、その経営の為に多くの労働を注ぎ込める様になつた。

私はここには正しい思想が含まれている事を即座に認めた。しかしながらマルサスに対する異論は少しも和らげられる事なく存在している。人はただ数字を眺めるだけで充分である。

大ブリテンは1754年にほぼ1,060万の人口を擁していた。しかも大

ブリテンは当時資本主義の可成りの発達によつて工業も商業も高度に進んだ国であつた。しからば都市化によつて統計的な意味でどれだけの農民が農村から解放され都市に流入しただろうか？。我々は当時全人口の¾が農村に住んでいたと仮定し—これは確かに過大評価なのではあるが—、また農民の各々がその労働の半分を工業的な副業に費していた—これは確かにさらに過大評価なのであるが—と仮定しよう。そうすれば当時の農村には約４００万の〝統計的錯誤〟が存在した事になる。だが大ブリテンはBallodの計算によると、１８２１年にはほぼ2,１００万、１８３１年には既に2,４００万の住民を擁していたので、１７５４年以来1,０００万から1,３００万の人口が増加した事になる。しかもこの様な増加人口は全部都市に流入したものである事は御承知の通りであり、従つて上述の〝統計的錯誤〟も、しかもそれが非常な過大評価であるにもかかわらず、実際起つた都市化の一部を説明し得るにすぎないのである。しかも１８３１年以前においてはイギリスの食糧輸入は非常に少ないので考慮する必要はない[1]。平時においても大量の穀物・粉・肉類が輸入される様になつたのは、１８４３年の穀物関税の廃止以来の事である。

今一つの例を取つて見よう。１９世紀の初めドイツはほぼ2,４００万の住民を有しており、その¼が都市に居住していた。そこでかりに1,８００万の農村人口がその労働の半分を工業的な副業に用いていたとするならば、９００万人の都市化は説明可能である。だがドイツは１８７６年に、当時は未だ穀物の大量輸出が行われていたのであるが、ほぼ4,２００万の人口を擁していた。ところで1,８００万の増加は統計的錯誤が説明できる精一杯の２倍の数字なのである。というのはマルサスの意見が正しければ、都市人口の増加は９００万よりもはるかに少なからざるを得なかつたであろうから。

それ故マルサスに対する古い古された非難は依然として有効なのである。

1） Ballod 前掲書３００ページ

ところでボーレ・ベルンシュタイン的批判はDietyelが私に対して適用され得るとした議論に於ても用いられている。

Dietyelは言う『この法則の作用する所では、農業生産に従事する人口部分は農業生産物の加工その他の為に働いている人口部分を犠牲にして増加しなければならぬ。だが前者は決して〝農民〟と相蔽うものではないし、後者は〝都市居住者〟と一致するものではない。農業生産物の生産の為には、〝農民〟によつてではなくおそらく農村にも都市にも住んでいる他の生産者によつて為される多くの不可欠の仕事があるであろう。それ故農産物の生産に従事する人口部分を規定する為には、直接の農業労働者、すなわち農民の数に、間接の農業労働者の数を全て加えねばならぬ。それ故全人口中の農民と都市居住者との関係の変動に就いての資料は、農業の生産性が下り坂であるか否かと言う事については如何なる解明も与えないし、一度たりとも大ざつぱな解明をさえ与え得なかつた。』

『農業用の機械や道具を作る人、排水溝を造り築えつける人、人工肥料—例えば加里塩—を造る人、農業用の建築に用いる石・煉瓦・木材・鉄等々を製造する人、また斯様な材料を使つてかかる農業用の建物を建てる人、更に農業が必要とする以上の様な物をば鉄道や船等々で運ぶ人。要するに農業生産に必要な物を生産し輸送する人。これらの人々は穀物を栽培し家畜を飼育する人々と同様農業生産者なのである。』

『統計がこれまでと同様将来も斯様な間接的な農業労働者の数を計算する手掛りを与えてくれぬ事は明らかである。それ故人が若しオッペンハイマーの様に、斯様な間接的農業労働者の存在に注意を払わずに、収穫逓減の法則が働いているかいないかという問題をば、単純に全人口内における〝農民〟と〝都市居住者〟との割合の変動に基づいて判断しようとすれば、みじめな誤算に陥入る丈である。』

Dietyelの趣旨は明らかである。Dietyelは社会の進歩発達と共に、全人口1人当りにつき少くとも同量の食糧を生産する為には、全社会的労働力の

より多くの部分が必要とされるに至るか？。それともより少ない部分で間に合う様になるか？。と言う問題を提起しているのである。Dieb yol 自身も言う様にこれを統計的に解決する事は出来ない。けれども、彼といえども第一の仮定が全くありそうにもない仮定である事を認めざるを得ないであろう。国民の富は全く速やかに増大した。そして勿論その最大部分は所有者階級の手に入つたのではあるが、下層階級もまた大体において以前よりもよりよい衣服と住居と精神的享楽と医療保護と交通手段等々を与えられるに至つている。だが我々はともかくこの疑問が納得の行く様に答えられ得たと仮定しよう。その場合我々の問題について如何なる結果が生ずるであろうか？。何も出て来はしない。それは、高度の協業によつて成立している社会では、多くの労働力が間接的農業生産者として食糧生産者と協力する為に配置される結果、収益逓減の法則は補償され、その上補償されて余りあるに至るだろうし、またその為に他の欲求充足の手段の不足が生ずると言う様な事はない。むしろその上分業とその結果によつて機械の使用は更に増大する事になる、という事以外を証明しない。そしてそれこそが正しく私の主張した事なのである。

以上とは逆に私の問題提起に対しては確実な答が得られる。

私は一定面積における人口密度の稠密化と共に、非農業者、すなわち〝間接的農業労働者〟ならびに本来の工業労働者が消費し得る余剰は増大したかそれとも減少したか、という事を問題にする。〝間接的農業労働者〟といえどもまた一定量を食べねばならない。すなわち彼等もまた適当な食糧の余剰が供給されねば生存し得ないのである。だが他方、若し工業が農業に対しよりよい道具肥料木材その他を生産し輸送しなければ斯様な余剰は得られないであろう。だがこれこそ正しく私がマルサスと争つている問題なのである。社会的分業は農業労働を徐々に絶えず生産的にしたので、たえずより多くの食糧の余剰が生産されるようになり、またそれは分業をますます高等ならしめ、それによつて農業の生産性はさらに成長する。そして事実毛織物製造者やヤヤラコ製造者は、肥料生産者や家屋所有者と同様農業の収益性を高める為に

役立つたのである。何故なら彼等もまた、以前は副業の為に用いられ農業の為には失われてしまつた農民の労働時間を農業的目的の為に自由にしたから。

要約すれば、ここで問題になるのは直接の食糧生産者と他の全ての人口集団との間の関係なのである。すなわちその労働によつて直接あるいは間接に食糧生産に寄与する人々（それには厳密に言うならば、国民経済社会における全ての就業者、医師・夜警・官吏などなども含まれる）と食糧の余剰を交換によつて得ねばならぬ人々との関係ではなく、直接食糧生産に従事しそれ故差当り自分自身の需要に応ずる人々と、余剰食糧を交換によつて得ねばならずそれ故全てを含めて食糧の全余剰以上のものを得る事が出来ない人々との間の関係が問題なのである。それ故全てを要約して、若し人が農業の余剰全体を個々人の最低必需量によつて分けた場合に獲い得るより以上の最早生存する事の不可能な人々の存在如何が問題なのである。

ところでDietyel も Budge も直接的農業生産者ではない人口数が、全人口数よりも速かに増加したし、また直接的農業生産者数に比べるならば更に速かに増加した事を疑わないであろう。それは又農業の余剰総額が人口よりもより速かに増大した事の証明でもある。それは換言すれば、全ての農家は平均して、たとえ彼等の経営が以前より小規模化していようとも、以前よりも生産が増大したという事にもなる。さもなければ彼等は自らの需要を満した後に平均してより多くの余剰を市場に供給し得ない事になろう。そして若しかくの如くであるならば、以上の事実と共に農業における生産の法則（Dietyel の "Gesety der Degression"）は人口密度の増大と農業の発展に伴う収益逓増の法則（Dietyelの "Gesety der Pvgression"）によつて補償されて余りあるものである事が証明される。斯くてマルサス主義も同時に論破されるのである。

さて Wolf や Budge と同様Dietyel も、実際経済が余り大きな政治的障害にわずらわされずに発達し得た全ての地域で斯様な Überkompensation が過去一世紀間に継続して生じたという点では私の意見に喜んで同意する。

彼は言う『衰退の法則の干渉にもかかわらず明らかに、それについて我々が語つて来たところの全ての時期に Überkompensation が行われた。少なくともドイツにおいてはそうであつた。』

私はこの承認を受け入れる事にしよう。それ以上に何も必要ではない。

吾々が問題にした資本主義的発展の時期において、人口はその生活空間に無理に詰め込まれる事がなかつた事は明らかである。だがしからばプロレタリアの賃銀及び資本主義社会の貧困は如何にして説明されるのか？。マルサスは人口がその生活空間に無理に詰め込まれると言う逆の主張以外の説明手段を持たない。そして Dietzel も他の擁護者達と同様他の説明方法を指示しはしない。彼はただせいぜい見通し得る将来の時期においては Überkompensation が行われるだろうと言う私の予測が偽りである事を証明するのに骨折つているだけである。そこで彼の証明が正しい場合を考えて見よう。２１世紀に人口がその生活空間に無理に詰め込まれる様になるだろうという事が証明されても、それによつて１９世紀の賃銀の動きは説明されるだろうか？。私はここでも、明日起るであろうことが、昨日起つたり今日起りつつある事の証拠となるであろうかという私の疑問を繰返すことができるのではなかろうか？。

だが１９世紀の賃銀の動きの説明という事だけがここでは問題なのである。そして人はそれを Budge が彼の反論において試みたように、ただ私によつて正当な理由から異論を唱えることのできる諸々の主張、とりわけ人口法則はある場合には作用するとか、収益逓減の法則が補償されてあまりあるものであるとかいう主張を繰り返すだけでは解決しえないのである。